

瓜生堂遺跡第53次発掘調査報告

2007. 3

東大阪市教育委員会

瓜生堂遺跡第53次発掘調査報告

2007. 3

東大阪市教育委員会



絵画文土器(堅穴住居)

例　　言

1. 本書は一級河川寝屋川八戸ノ里公園(小阪)調節池築造工事(排水施設工)に伴う瓜生堂遺跡第53次発掘調査の報告書である。
2. 調査は大阪府寝屋川水系改修工営所の依頼を受けて、東大阪市教育委員会文化財課が実施した。
3. 調査にかかる費用は全額大阪府寝屋川水系改修工営所が負担・用意した。
4. 発掘調査は平成17年10月3日～12月13日まで行なった。遺物整理は平成18年7月31日、報告書作成作業は平成19年3月31日まで実施した。
5. 現場調査及び遺物整理は才原金弘と小川紀子・松田直子が担当して行なった。
6. 基準杭・調査杭設置はオオサカクリーンサービス株式会社、遺物写真撮影は株式会社コミュニケーションに委託して実施した。
7. 本書はⅡ・Ⅲを小川、他の章を才原が執筆し、編集を行なった。
8. 土層断面図の土色は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人色彩研究所色票監修香「新版 標準土色帳」(2000年版)に準拠し、記号表記もこれに従った。
9. 調査の実施にあたっては、大阪府水道部東部水道事業所のご協力のもと、施工業者ならびに近隣市民の方々のご協力を賜った他、現場作業および整理作業には田島繁一・西川美奈子・片山くみ子が従事した。これらの方々に記して感謝いたします。

目 次

I. 調査に至る経過.....	1
II. 位置と環境.....	2
III. 調査の概要.....	4
1. 調査の方法と地区割り.....	4
2. A 地区の層位.....	4
3. B 地区の層位.....	6
4. A 地区の遺構.....	7
5. B 地区の遺構.....	8
IV. 出土遺物.....	9
1. A 地区出土遺物.....	9
2. B 地区出土遺物.....	19
V. まとめ.....	25

挿 図 目 次

第1図 調査地点位置図.....	1
第2図 周辺遺跡分布図.....	3
第3図 調査地区割り図.....	4
第4図 A 地区断面実測図.....	5
第5図 B 地区断面実測図.....	6
第6図 A・B 地区遺構平面実測図.....	8
第7図 縄文土器実測図.....	9
第8図 絵画文土器復原図(実寸).....	10
第9図 土坑1~3出土土器実測図.....	11
第10図 第10・11層出土土器実測図.....	13
第11図 第10・11層出土土器実測図.....	14
第12図 家形埴輪実測位置図.....	15
第13図 第2・3層出土土器実測図.....	16
第14図 第2層、搅乱層出土土器実測図.....	17
第15図 石器実測図.....	18
第16図 土坑5・第15層出土土器実測図.....	20
第17図 第15層出土土器実測図.....	21
第18図 溝7・8出土土器実測図.....	23
第19図 第3・4層、搅乱層出土土器実測図.....	24

図 版 目 次

- 図版1 遺構 1. 調査地遠景(北より)
2. 調査地近景(南より)
- 図版2 遺構 1. A地区第4層上面遺構(北より)
2. A地区第12層上面遺構(東より)
- 図版3 遺構 1. A地区第12層上面遺構(南より)
2. A地区第12層上面遺構(北より)
- 図版4 遺構 1. A地区第24層上面自然流路(東より)
2. 自然流路内断面(南より)
- 図版5 遺構 1. A地区土坑1内弥生土器出土状況(東より)
2. A地区第10層内弥生土器出土状況(北より)
- 図版6 遺構 1. A地区上層北壁断面(南より)
2. A地区下層北壁断面(南より)
- 図版7 遺構 1. A地区作業風景
2. B地区第5層上面遺構(東より)
- 図版8 遺構 1. B地区第16層上面遺構(南より)
2. B地区第16層上面遺構(西より)
- 図版9 遺構 1. B地区第15層内弥生土器出土状況(北より)
2. B地区第15層内弥生土器出土状況(西より)
- 図版10 遺構 1. B地区上層西壁断面(東より)
2. B地区下層西壁断面(東より)
- 図版11 遺構 1. B地区上層南壁断面(北より)
2. B地区上層南壁断面(北より)
- 図版12 遺物 A地区第25層出土繩文土器 深鉢、土坑1・2、第10・11層出土弥生土器 紋画文
土器、壺、壺蓋
- 図版13 遺物 A地区第10・11層出土弥生土器 細頸壺、第10・11層出土石器 石庖丁、石鎌、攪
乱層出土土師器 高杯
- 図版14 遺物 1. A地区土坑2出土弥生土器 壺、高杯
2. A地区土坑2出土弥生土器 細頸壺、高杯、無頸壺、壺
- 図版15 遺物 1. A地区土坑1~3出土弥生土器 高杯、壺、底部
2. A地区第10・11層出土弥生土器 壺
- 図版16 遺物 1. A地区第10・11層出土弥生土器 無頸壺、壺蓋、水差形土器、高杯
2. A地区第10・11層出土弥生土器 高杯
- 図版17 遺物 1. A地区第10・11層出土弥生土器 鉢、台付鉢、器台
2. A地区第10・11層出土弥生土器 壺
- 図版18 遺物 1. A地区第10・11層出土弥生土器 壺
2. A地区第10・11層出土弥生土器 壺
- 図版19 遺物 1. A地区第10・11層出土弥生土器 底部

2. A地区第10·11層出土弥生土器 底部
- 图版20 遗物 1. A地区第10·11層出土弥生土器 底部
2. A地区第2·3層出土弥生土器 鉢、須恵器 蓋杯、土師器 壺、羽釜、皿
- 图版21 遗物 1. A地区第2·3層出土埴輪 形象埴輪
2. 同上(裏)
- 图版22 遗物 1. A地区第2·3層出土埴輪 円筒埴輪、形象埴輪、平瓦
2. A地区搅乱層出土埴輪 円筒埴輪、土師器 壺、白磁 梶
- 图版23 遗物 1. B地区第15層出土弥生土器 壺
2. B地区土坑5出土弥生土器 高杯、鉢、壺蓋、底部
- 图版24 遗物 1. B地区第15層出土弥生土器 壺、細頸壺、壺蓋
2. B地区第15層出土弥生土器 壺、壺
- 图版25 遺物 1. B地区第15層出土弥生土器 壺、鉢
2. B地区第15層出土弥生土器 高杯
- 图版26 遺物 1. B地区第15層出土弥生土器 底部
2. B地区溝7·8出土須恵器 鉢、器台、蓋杯、土師器 皿、瓦器 梶、埴輪、形象埴輪、円筒埴輪
- 图版27 遺物 1. B地区第3·4層出土弥生土器 壺、須恵器 壺、土師器 壺、皿、製塙土器、平瓦
2. B地区第3·4層、搅乱層出土埴輪 形象埴輪、円筒埴輪

I 調査に至る経過

瓜生堂遺跡は弥生時代の遺跡として学史的にも著名である。当遺跡は工業用水道管理設工事に伴って昭和40年に発見された。工事では多量の弥生土器と青銅利器が採集され、当遺跡は広く周知されるようになった。

昭和46年より本格的な発掘調査が実施され、盛土の残る方形周溝墓が全国に先がけて確認された。その後、発掘調査が進み墓域や集落域が明らかになりつつある。当遺跡では多種多様な遺物が出土している。遺跡が深い位置に存在することから、木製品や骨製品など有機質のものも良好な保存状態で残っている。弥生時代の生活などを復原する上でも貴重な資料となっている。また、遺跡の範囲も広く、弥生時代においては拠点的な集落と位置づけられている。上層では古墳時代～中世期の遺構も見つかっており、複合遺跡であることが判っている。現在、52次にも及ぶ発掘調査が実施されており、大きな成果が得られている。

今回、東大阪市若江西新町2丁目で大阪府寝屋川水系改修工営所によって排水施設工事が計画された。当地点は第二寝屋川の西側堤防上に位置し、瓜生堂遺跡内に当たるので、大阪府寝屋川水系改修工営所長より埋蔵文化財発掘の通知が提出された。大阪府寝屋川水系改修工営所と東大阪市教育委員会文化財課が協議を実施することになった。協議の結果、工事による掘削は深い場所で約5.5mに至り、発掘調査の必要ができた。同一場所ではあるが発掘調査は工事の都合により、2回に分けて実施することになった。



II. 位置と環境

瓜生堂遺跡は大阪平野中央部に位置し、標高が5m前後を測る。東には生駒山麓が広がる。近鉄奈良線八戸ノ里駅の南東にある。遺跡の中心を南北に中央環状線及び近畿自動車道が伸び、北端付近を東西に近鉄奈良線が通る。東大阪市若江西新町、瓜生堂一丁目、若江北町一丁目の一帯に広がる遺跡である。

当遺跡は旧大和川によって形成された自然堤防や三角州の微高地に立地する弥生～歴史時代の複合遺跡である。周辺には北に新家・岩田遺跡、南に若江・巨摩廃寺・山賀遺跡があり、弥生～古墳時代の遺跡が集中する地域である。

当遺跡が出現する前は現在の河内平野北半分が繩文時代前期頃まで海であり、生駒山麓付近まで海進により河内湾が形成されていた。その後、海水の流入が減り河内潟になる。さらに土砂などの堆積が進み淡水化して河内湖に変化する。また、旧大和川の流れで運ばれた土砂によって三角州が広がり、湿地帯となっていく。当遺跡は河内湖の南側に位置する。

弥生時代前期に当遺跡や周辺の遺跡では稻作に適する後背湿地を利用して農耕が始まり、集落が営なまれるようになる。当遺跡や南側に位置する若江北・山賀遺跡から集落や水田が確認されている。若江北遺跡では掘立柱建物や堅穴住居などが検出されているが集落は短期間で終わっている。山賀遺跡は集落の規模は大きく遺物の出土量も多いが、中期になると次第に衰退していく。

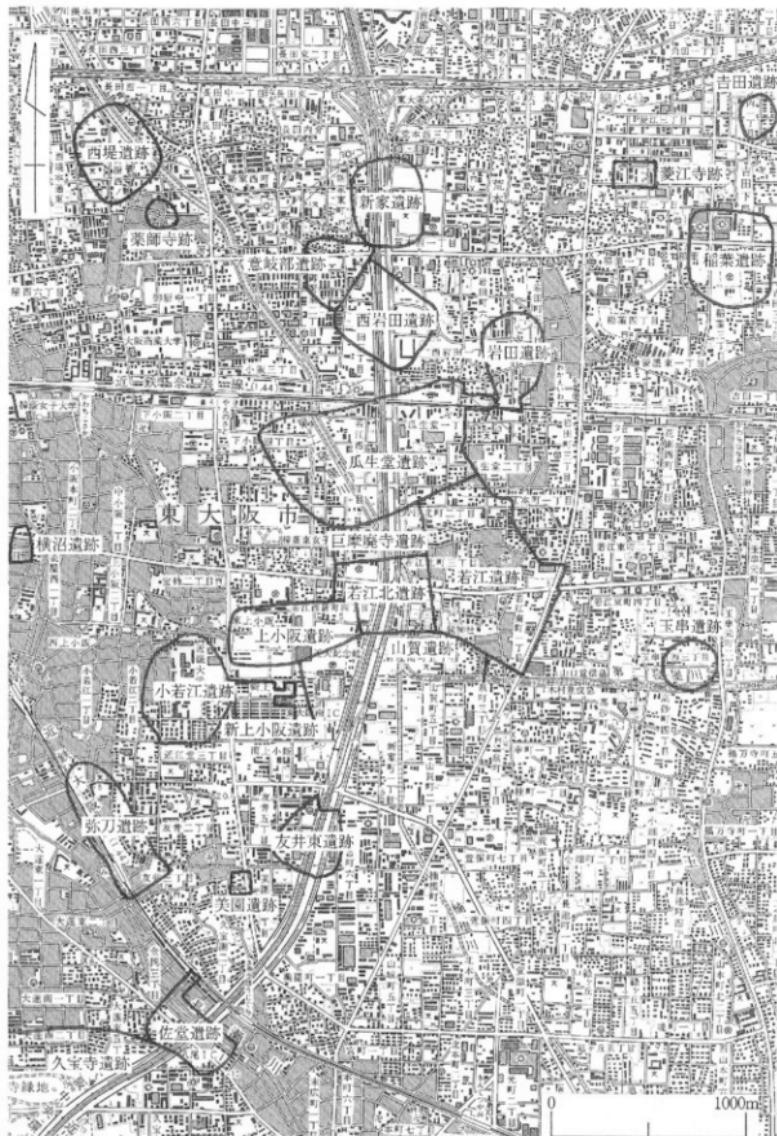
中期になると前期から続く当遺跡は最盛期をむかえる。遺跡の範囲は東西1.1km、南北0.7km占める大規模な集落と発展する。複数の墓域で遺存状態の良い数多くの方形周溝墓や木棺墓、土器棺墓、土壙墓などが発見されている。集落域では掘立柱建物群等の遺構が確認されている。遺物では多量の土器、木製品、石器、土製品等が出土している。また、銅戈などの金属製品も発見されている。当遺跡と南側に位置する遺跡群以外には、ほぼ同じ頃に東側の山麓に鬼虎川・西ノ辻遺跡などが存在する。鬼虎川遺跡は当遺跡と同様に大集落を形成していたことが判っている。その後、当遺跡周辺では広い範囲で河川の氾濫による土砂が堆積し、地点によっては1m前後まで及ぶ。この氾濫により住居などが埋没して衰退する。また、この頃から生駒山西麓の標高約100m前後の高所に山畠・岩滝山遺跡などの高地性集落が出現する。

後期は中期に見られた大集落は縮小している。当遺跡内や南側の若江・若江北・上小阪・山賀遺跡等に分かれて小集落が形成されていると考えられる。また、遺物量も減少する。墓域では方形周溝墓が巨摩廃寺遺跡と若江北遺跡で見つかっている。

古墳時代は明確な古墳は確認されていないが中期～後期にかけて小型低方墳が巨摩廃寺遺跡と山賀遺跡から検出されている。当遺跡と周辺の遺跡からも円筒埴輪や形象埴輪等が多量に出土していることから近くに削平された古墳の存在が想定できる。

飛鳥・奈良時代以降は、当遺跡では掘立柱建物群や井戸などが見つかっている。遺物は墨書き土器、黒色土器、旋釉陶器、製塙土器などが出土している。集落域かもしくは、付近にあると想定されている若江郡衙の可能性も考えられる。また、東に位置する若江寺跡では白鳳時代以降の多量の瓦や破片ではあるが唐三彩が出土している。平安時代に記載されている若江寺の存在が想定されるが、若江城の築城などによって大規模な整地がおこなわれ削平されたと思われる。多量の遺物は出土するが寺関係の明確な遺構は確認されていない。

以上のように当遺跡は弥生時代以降、各時代を通して人々が集落を営み、現在まで継続している地域である。

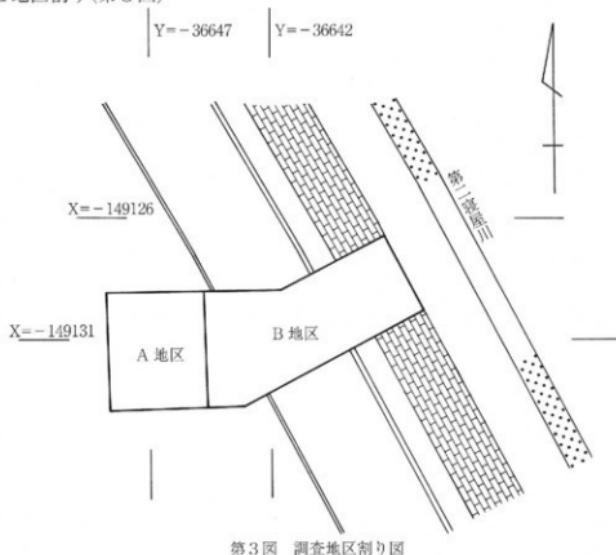


第2図 周辺遺跡分布図

III. 調査の概要

1. 調査の方法と地区割り(第3図)

今回の調査地はく字形を呈する立坑である。調査地は矢板によって2分されている。西側をA地区、東側をB地区と仮称する。国上座標はX = -149131、Y = -36642と-36647を設定した。調査はA地区終了後、B地区とおこなった。盛土は機械掘削し、その下は人力掘削で精査した。調査面積はA地区とB地区合わせて44m²である。



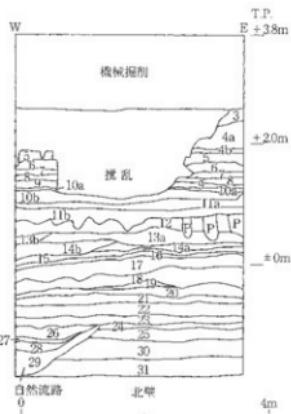
第3図 調査地区割り図

2. A地区の層位(第4図)

A地区の発掘調査は工事掘削深度により、GL-5.5mまで行った。また、断面中央部は既設管があるため搅乱を受けている。

- 第1層 盛土。層厚1.2~1.3mを測る。
- 第2層 暗オリーブ色(2.5GY3/1)粗粒砂混じり粘質シルト。中世期の土器を少量含む。層厚10~20cmを測る。断面では確認出来なかつたが、調査区の南側に堆積する。
- 第3層 オリーブ黒色(5Y3/2)中~粗粒砂混じり粘質シルト。古墳~平安時代の遺物包含層である。層厚20cmを測る。
- 第4層 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)細粒砂混じりシルト~粘質シルト。この層の上面で奈良~平安時代のピット、溝を検出した。層厚30~40cmを測る。
- 第5層 オリーブ黒色(7.5Y3/2)粘土。層厚20cmを測る。
- 第6層 暗オリーブ灰(5GY3/1)シルト。層厚10~20cmを測る。
- 第7層 暗オリーブ灰色(5GY3/1) 細粒砂混じり粘質シルト。層厚10cmを測る。
- 第8層 暗オリーブ灰色(5GY3/1)シルト。層厚10cmを測る。
- 第9層 黒色(2.5GY2/1)粘土。層厚5~10cmを測る。
- 第10a層 暗オリーブ灰色(5GY3/1)粗粒砂混じり粘質シルト~粘土。弥生時代中期の土器を少量含む。層厚4~10cmを測る。

- 第10b層 黒色(2.5GY2/1)粘土。弥生時代中期の遺物包含層である。層厚10~20cmを測る。
- 第11a層 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)中粒砂混じり粘質シルト~シルト。弥生時代中期の遺物包含層である。層厚10~20cmを測る。
- 第11b層 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)細粒砂混じり粘質シルト~シルト。弥生時代中期の遺物包含層である。層厚10~30cmを測る。
- 第12層 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘質シルト。一部に粘土を含む。この層の上面で弥生時代中期のピット・土坑・溝を検出した。層厚20~30cmを測る。
- 第13a層 暗緑灰色(10GY3/1)シルト。層厚10~30cmを測る。
- 第13b層 暗オリーブ灰色(5GY3/1)粗粒砂混じりシルト。層厚10cmを測る。
- 第14a層 暗オリーブ灰(5GY4/1)シルト。部分的に砂を多く含む。層厚10cmを測る。
- 第14b層 暗緑灰色(5G3/1)細粒砂混じり粘質シルト。葦等の植物遺体を含む。層厚10~20cmを測る。
- 第15層 暗オリーブ灰色(5GY3/1)粘土。部分的に砂を多く含む。層厚10cmを測る。
- 第16層 暗オリーブ灰色(5GY3/1)粘土。層厚10cmを測る。
- 第17層 暗オリーブ灰色(5GY3/1)粘土・オリーブ黄色(5Y6/3)砂。層厚20~30cmを測る。
- 第18層 灰白色(5Y7/2)粗粒砂混じり砂。層厚10~30cmを測る。
- 第19層 緑灰色(5G5/1)シルト~砂。層厚2~10cmを測る。
- 第20層 緑灰色(5G5/1)シルト。層厚10~20cmを測る。
- 第21層 オリーブ黒色(7.5Y3/1)中粒砂混じり粘土。葦等の植物遺体を含む。層厚10~20cmを測る。
- 第22層 オリーブ黒色(5Y3/1)粘土。層厚20cmを測る。
- 第23層 オリーブ黒色(7.5Y3/1)粗粒砂混じり粘土。マンガンを多く含む。層厚10~15cmを測る。
- 第24層 オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土。葦等の植物遺体を含む。層厚10cmを測る。
- 第25層 オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土。部分的に暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)シルトを含む。縄文土器が1片出土した。層厚10~20cmを測る。
- 第26層 灰色(5Y4/1)粗粒砂混じり砂。マンガン多く含む。自然流路の堆積土である。層厚は20cmを測る。
- 第27層 オリーブ黒色(5Y3/2)粘土~粘質シルト。葦等の植物遺体や炭化物が層として堆積する。自然流路の堆積土である。層厚は8cmを測る。
- 第28層 黒色(2.5GY2/1)粘土。部分的に暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)シルトを含む。一部に葦等の植物遺体を含む。自然流路の堆積土である。層厚16cmを測る。
- 第29層 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)シルト。部分的に黒色(2.5GY2/1)粘土を含む。一部に葦等の植物遺体を含む。自然流路の堆積土である。層厚40cmを測る。
- 第30層 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)粘土。一部に葦等の植物遺体や炭化物を含む。層厚30~40cmを測る。



第4図 A地区断面実測図

第31層 オリーブ黒色(7.5Y3/1)中粒砂混じり粘土。全体に葦等の植物遺体を多く含む。層厚20~30cmを測る。

3. B地区の層位(第5図)

B地区の発掘調査は工事掘削深度により、GL-3.4mまで行った。南壁の東側は第二寝屋川堤防の基礎工事により搅乱を受けている。

第1層 盛土。層厚1.2~1.3mを測る。

第2層 暗オリーブ灰色(25GY3/1)粗粒砂混じり粘質シルト。中世期の土器を少量含む。層厚4~6cmを測る。

第3層 オリーブ黒色(5Y3/1)中粒砂~粗流砂混じり粘質シルト。古墳~平安時代の遺物包含層である。層厚10~20cmを測る。

第4a層 黒褐色(25Y3/1)中粒砂混じり粘質シルト。一部中粒砂混じりシルトをブロック状に含む。古墳~平安時代の遺物包含層である。層厚20cmを測る。

第4b層 黒褐色(25Y3/2)細粒砂混じり粘質シルト。古墳~平安時代の遺物包含層である。層厚10~15cmを測る。

第5a層 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質シルト。ブロック状にシルトを含む。この層の上面で奈良~平安時代の溝を検出した。層厚20~40cmを測る。

第6層 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土。筋状に炭化物を含む。層厚2~6cmを測る。

第7a層 黒褐色(25Y3/2)中粒砂混じり粘質シルト。層厚2~10cmを測る。

第7b層 黒褐色(25Y3/1)細粒砂混じり粘質シルト。鉄分を多く含む。層厚10~20cmを測る。

第8層 緑黒色(7.5GY2/1)細粒砂混じり粘土。部分的に鉄分を含む。層厚20cmを測る。

第9層 灰色(5Y4/1)細粒砂混じり粘土~粘質シルト。鉄分を多く含む。層厚10cmを測る。

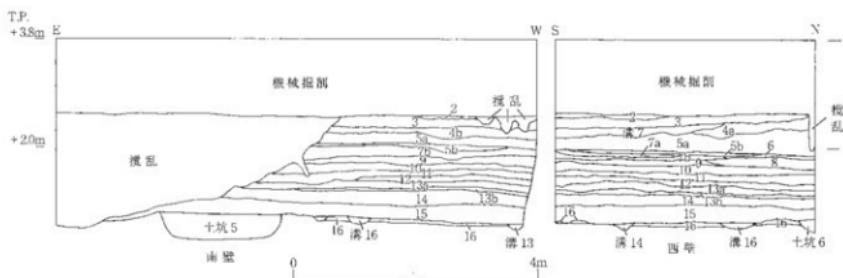
第10層 灰オリーブ色(5Y5/2)シルト。鉄分を多く含む。層厚10~20cmを測る。

第11層 暗オリーブ灰色(25GY4/1)シルト。ブロック状に粘土を含む。層厚10~20cmを測る。

第12層 緑灰色(7.5GY5/1)細粒砂混じりシルト~粘質シルト。層厚10cmを測る。

第13a層 オリーブ黒色(5Y3/1)粘土。一部に葦等の植物遺体を含む。弥生中期時代中期の土器を少量含む。層厚4~14cmを測る。

第13b層 オリーブ黒色(5Y3/1)粘土。葦等の植物遺体が層として堆積する。弥生中期時代中期の土器を少量含む。層厚4~10cmを測る。



第5図 B地区断面実測図

- 第14層 黒色(7.5Y2/1)粗粒砂混じり粘土。弥生時代中期の遺物包含層である。層厚4~30cmを測る。
- 第15層 オリーブ黒色(10Y3/1)粗粒砂混じり粘土~粘質シルト。小砾を含む。弥生時代中期の遺物包含層である。層厚30~40cmを測る。
- 第16層 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘土。この層の上面で弥生時代中期のピット・土坑・溝を検出した。

4. A地区の遺構

第4層上面遺構(第6図)

調査地区の西側半分は搅乱を受けている。東側半分では奈良~平安時代の遺構を検出した。ピット2基、溝4条がある。遺構の埋土はオリーブ黒色(5Y3/2)細粒砂混じりシルト~粘質シルトが堆積する。

ピット1 調査区外に伸びるため全形は不明であるが平面形は楕円形を呈すると考えられる。長径60cm、短径30cm、深さ10cmを測る。

ピット2 調査区外に伸びるため全形は不明であるが平面形は楕円形を呈すると考えられる。長径70cm、短径30cm、深さ10cmを測る。

溝1 東西方向に伸びる溝である。東端は調査区外へ伸びる。幅60cm、深さ5~10cmを測る。

溝2 東西方向に伸びる溝である。東端はピット1に切られている。幅20cm、深さ4cmを測る。

溝3 東西方向に伸びる溝である。幅20cm、深さ8cmを測る。

溝4 東西方向に伸びる溝である。東端は調査区外へ伸びる。幅50cm、深さ5cmを測る。

第12層上面遺構(第6図)

弥生時代中期の遺構を検出した。ピット6基、土坑4基、溝2条がある。遺構の埋土は緑黒色(5G2/1)細粒砂混じり粘土である。土坑2のみが黒色(N2/)粘質シルト~シルトであり、炭化物を多く含む。

ピット3 土坑1に切られおり、全形は不明であるが平面形は円形を呈すると考えられる。径30cm、深さ15cmを測る。

ピット4 平面形は円形を呈する。径10cm、深さ15cmを測る。

ピット5 平面形は円形を呈する。径40cm、深さ40cmを測る。

ピット6 平面形は楕円形を呈する。長径20cm、短径15cm、深さ10cmを測る。

ピット7 平面形は円形を呈する。径20cm、深さ15cmを測る。

ピット8 平面形は楕円形を呈する。長径40cm、短径20cm、深さ16cmを測る。

土坑1 調査区外に伸びるため全形は不明であるが平面形はやや方形に近い楕円形を呈すると考えられる。長径2.0m、短径1.5m、深さ50cmを測る。

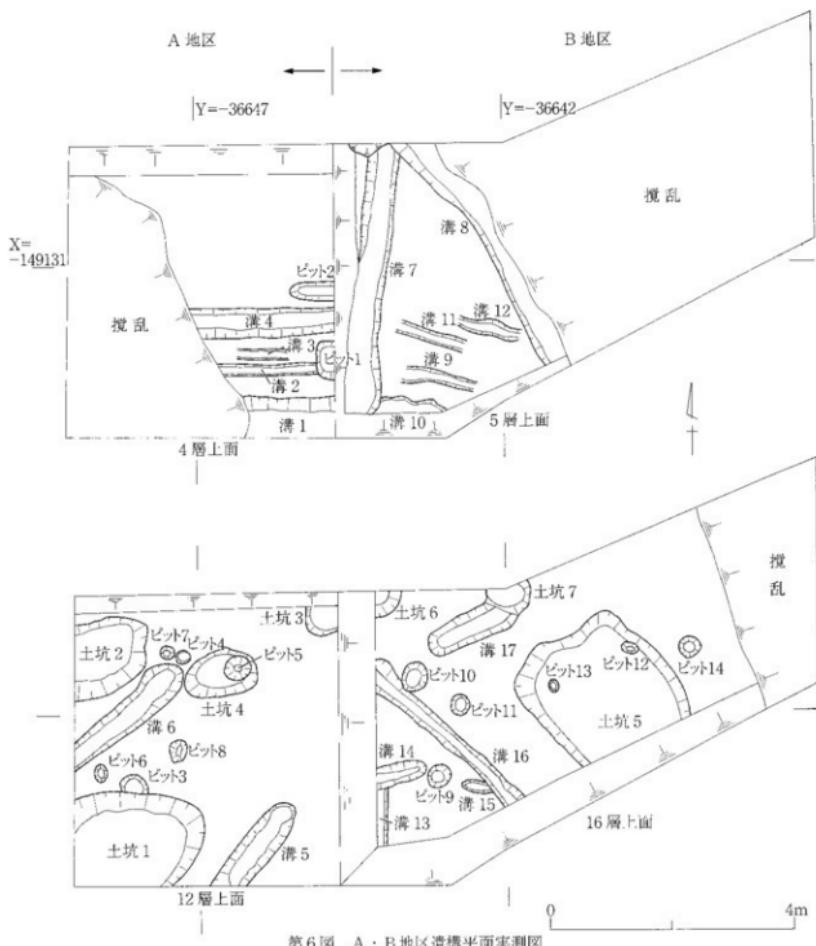
土坑2 調査区外に伸びるため全形は不明であるが平面形はやや方形に近い楕円形を呈すると考えられる。長径1.2m、短径1.3m、深さ10~17cmを測る。

土坑3 調査区外に伸びるため全形は不明であるが平面形は円形か楕円形を呈すると考えられる。長径50cm、短径40cm、深さ20cmを測る。

土坑4 平面形は楕円形を呈する。長径1.2m、短径80cm、深さ4cmを測る。ピット5に切られている。

溝5 南北方向に伸びる溝である。南端は調査区外へ伸びる。幅50cm、深さ8cmを測る。

溝6 南北方向に伸びる溝である。南端は調査区外へ伸びる。幅50cm、深さ7cmを測る。



第6図 A・B地区[遺構平面実測図]

5. B地区の遺構

第5層上面遺構(第6図)

調査地区的東側半分は撥乱を受けている。西側半分では奈良～中世期の遺構を検出した。溝6条がある。遺構の埋土は灰黄褐色(10YR4/2)シルト～粘質シルトが堆積する。

溝7 南北方向に伸びる溝である。南端は調査区外へ伸びる。北端は撥乱と溝8に切られている。幅50cm、深さ12cmを測る。

溝8 南北方向に伸びる溝である。南北端は調査区外へ伸びる。東側は撥乱を受けている。深さ4cmを測る。

- 溝9 東西方向に伸びる溝である。幅10~20cm、深さ4cmを測る。
- 溝10 東西方向に伸びる溝である。南端は調査区外へ伸びる。溝7に切られている。幅20cm、深さ4cmを測る。
- 溝11 東西方向に伸びる溝である。幅20cm、深さ5cmを測る。
- 溝12 東西方向に伸びる溝である。幅20cm、深さ4cmを測る。

第16層上面遺構(第6図)

調査区の東側の一部は擾乱を受けている。弥生時代中期の遺構を検出した。ピット6基、土坑3基、溝5条がある。遺構の埋土は黒色(7.5Y2/1)粘質シルトが堆積する。

- ピット9 平面形は円形を呈する。径40cm、深さ5cmを測る。
- ピット10 平面形は橢円形を呈する。長径50cm、短径40cm、深さ5cmを測る。
- ピット11 平面形は橢円形を呈する。長径40cm、短径30cm、深さ23cmを測る。
- ピット12 平面形は橢円形を呈する。長径30cm、短径20cm、深さ17cmを測る。
- ピット13 平面形は橢円形を呈する。長径20cm、短径15cm、深さ12cmを測る。
- ピット14 平面形は円形を呈する。径38cm、深さ29cmを測る。
- 土坑5 調査区外に伸びるため全形は不明であるが平面形は方形を呈すると考えられる。長径2.3m、短径2.1m、深さ20~25cmを測る。土坑内にピット12・13が並ぶ位置にあり、堅穴住居の可能性も考えられる。
- 土坑6 調査区外に伸びるため全形は不明であるが平面形は円形か橢円形を呈すると考えられる。長径50cm、短径40cm、深さ20cmを測る。
- 土坑7 調査区外に伸びるため全形は不明であるが平面形は円形か橢円形を呈すると考えられる。長径70cm、短径40cmを測る。
- 溝13 南北に伸びる溝である。南端は調査区外へ伸びる。溝14に切られている。幅15cm、深さ8cmを測る。
- 溝14 東西に伸びる溝である。西端は調査区外へ伸びる。幅40cm、深さ10cmを測る。
- 溝15 東西に伸びる溝である。東端は溝16に切られている。幅40cm、深さ5cmを測る。
- 溝16 南北に伸びる溝である。南北端は調査区外へ伸びる。ピット10に切られている。幅30~40cm、深さ10cmを測る。
- 溝17 東西に伸びる溝である。土坑7に切られている。幅40~50cm、深さ10cmを測る。

IV. 出土遺物

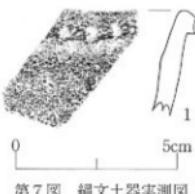
縄文時代～中世期の遺物が遺構及び遺物包含層より出土した。弥生時代の遺物が多い。

1. A地区出土遺物

遺構と遺物包含層に分けて説明を記す。

縄文土器(第7図 1)

1は縄文土器の深鉢である。口縁部が外上方へ伸び、口縁端部が丸く終る。口縁端部の直下に刻み目凸帯を1条廻らす。風化が著しく調



第7図 縄文土器実測図

整法は不明である。第25層より出土。生駒西麓産。晩期である。

弥生土器

弥生土器は中期のものであり、第III～IV様式である。

遺構出土土器

土坑1(第9図 15～17)

高杯と壺の器種がある。

15は高杯である。裾部は急に立ち上がり、裾端部を外上方へ拡張する。外面に4帯の竹管文が残る。内外面はナデ調整する。生駒西麓産。

16・17は壺である。16は底部が平底である。体部の張りは大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は面を持つ。体部外面はハケメの後、ナデ調整する。内面は下半をヘラケズリ調整、上半をハケメ調整する。17は16と形状が同様であるが口縁端部に2条の四線文を施す。体部外面はハケメ調整する。内面はハケメの後、ナデ調整する。生駒西麓産。

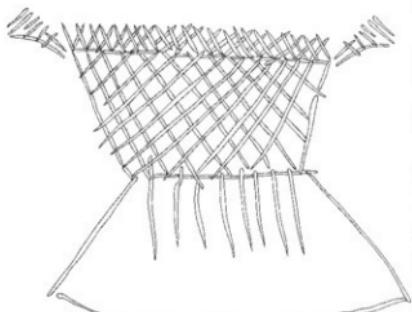
土坑2(第8・9図 2～14)

壺・細頸壺・無頸壺・甕・高杯・底部の器種がある。

2は絵画文のある壺の体部上半である。外面はハケメ調整する。堅穴住居と考えられる。ヘラ状工具によって細い線で描かれている。上部は逆台形を呈し、その中に斜格子を入れる。棟にはX状の線刻を加える。棟先には平行する2本の線に直交する6本の線があり、棟筋りと考えられる。下部はスカート状に描かれた中に8本の縦方向の線刻がある。垂木の表現とも考えられるが直線的であることや外まで線が伸びていないことから断定はできない。また、堅穴住居内を透視して柱を描いた可能性もある。いずれにしても全体的な形状から堅穴住居と考えられる。堅穴住居の右に4本、その上に3本の線刻が残っており、複数の絵画が描かれていたと思われる。非生駒西麓産。

3は壺である。口頭部が大きく外反する。口縁端部は下方へ拡張する。口縁端部に1帯の薺描籠状文を施す。外面はハケメ調整、内面はヘラミガキ調整する。生駒西麓産。

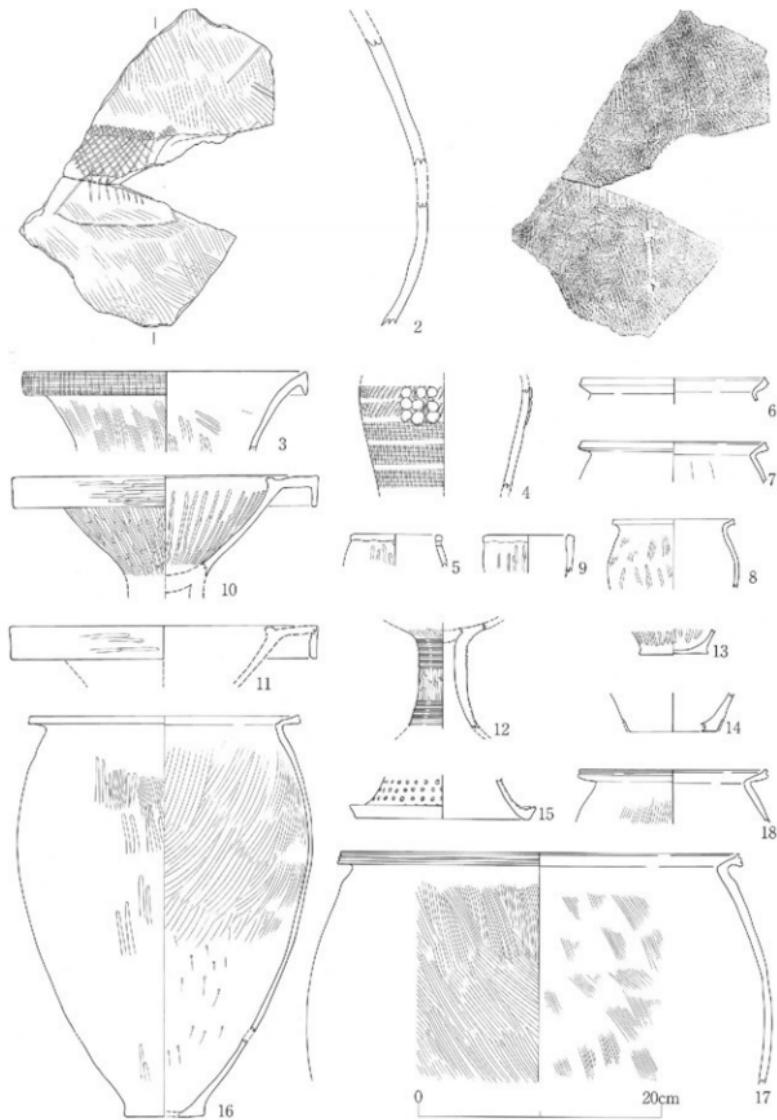
4は細頸壺の頸部である。内湾しながら上方へ伸びる。外面に2帯の描描列点文、その下に3帯の簾状文が残る。列点文の上に3個で3列を1単位とした円形浮文を貼り付ける。内面はハケメの後、ナデ調整する。生駒西麓産。



第8図 絵画文土器復原図(実寸)

5は無頸壺である。体部は内傾する。口縁部は短く外反し、口縁端部が丸く終る。口縁部直下に小円孔を穿つ。体部外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。生駒西麓産。

6～9は甕である。6・7は体部の張りが大きく、口縁部が外折する。口縁端部は上方へわずかに拡張する。風化が著しく調整法は不明である。8は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は面を持つ。体部外面はハケメの後、ヘラミガキ調整する。内面はナデ調整する。9は体部の張りが小さく、口縁部が短く外反する。口縁端部は丸く終る。体部外面は



第9図 土坑1～3出土土器実測図

ヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。生駒西麓産。

10~12は高杯である。10は杯部が外上方へ伸びる。口縁部は水平方向に伸び、口縁端部を下方へ大きく拡張する。口縁部と杯部の内面境には1条の凸帯を廻らす。外面はヘラミガキ調整する。11は10と同様の形態であるが口縁端部しか残っていない。外面はヘラミガキ調整する。12は中空の脚部である。裾部に向かってゆるやかに広がる。上部に10条の凹線文を施す。下部には9条が残る。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。生駒西麓産。

13・14は底部である。平底を呈し、体部の立ち上がりが急である。13は内外面をヘラミガキ調整する。14は内外面をナデ調整する。生駒西麓産。

土坑3(第9図 18)

18は壺である。体部の張りが大きく、口縁部が外折する。口縁端部は上方へ拡張する。口縁端部に1条の凹線文を施す。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。非河内産。

第10・11層出土土器(第10・11図 19~83)

壺・無頸壺・細頸壺・水差形土器・壺蓋・高杯・器台・台付鉢・鉢・壺・底部の器種がある。

19~25は壺である。19~23は口頭部が外反し、口縁端部をわずかに上下へ拡張する。19は口縁端部に1条の門線文を施す。外面をハケメの後、ナデ調整する。内面はナデ調整する。20~22は口縁端部に1帯の櫛描波状文を施す。外面はヨコナデ調整する。23は口縁端部に1帯、口縁端部内面に1帯の列点文を施す。頭部に1帯ずつ波状文と直線文が残る。24・25は口縁端部を幅広く拡張する。24は3条、25は2条の凹線文が残る。内外面はヨコナデ調整する。24は非河内産、他は生駒西麓産。

26・27は無頸壺である。体部が強く内傾する。口縁端部は折り曲げており、段を呈する。26は体部外面をナデ調整、内面をハケメ調整する。27は口縁端部に円形浮文を貼り付ける。体部外面をヘラミガキ調整する。内面はハケメの後、ヘラミガキ調整する。生駒西麓産。

28は細頸壺である。頭部が外上方に長く伸び、口縁部付近で内湾する。口縁端部は丸く終わる。外面に10帯の櫛描直線文を施す。内面はナデ調整する。生駒西麓産。

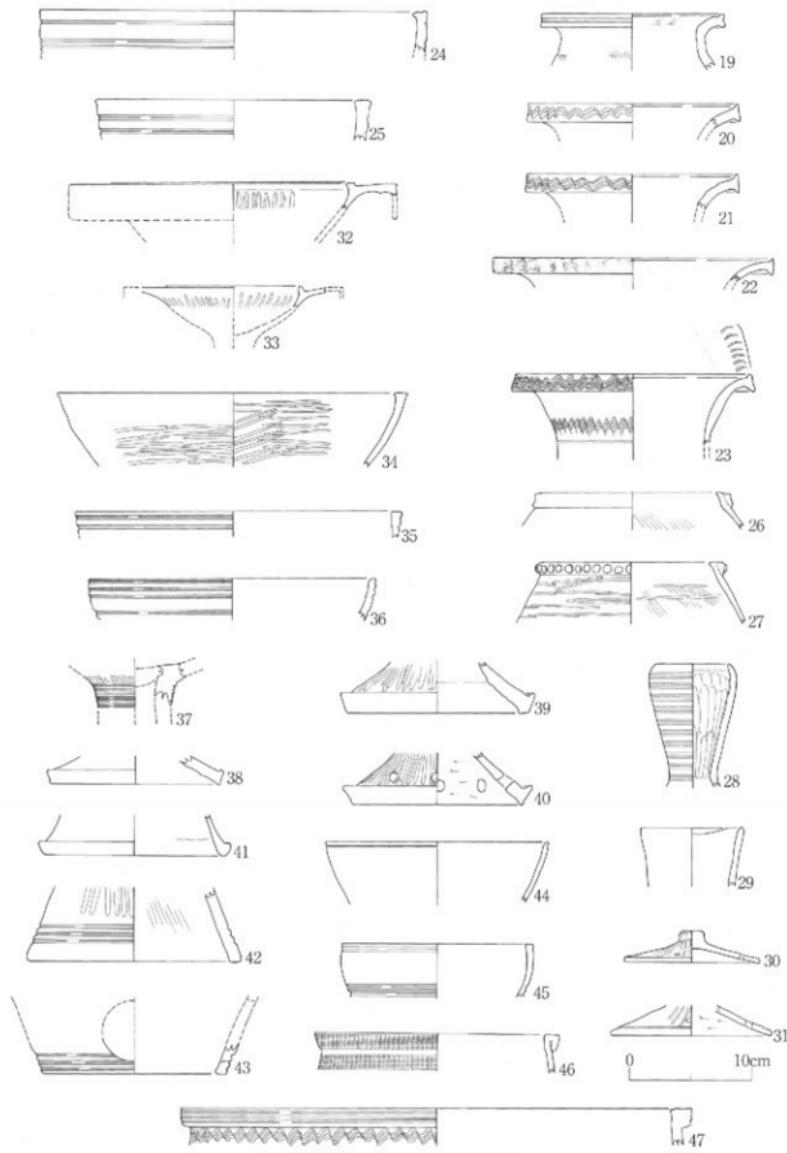
29は水差形土器である。口頭部が外上方に伸び、口縁端部が丸く終る。口縁部にゆるいU字形の切り込みを入れる。風化が著しく調整法は不明である。生駒西麓産。

30・31は壺蓋である。裾部の立ち上がりはゆるく、口縁端部が丸く終る。体部に小円孔を穿つ。30は中央に円形のつまみが付く。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。31は外面をヘラミガキ調整、内面をヘラケズリ調整する。30は生駒西麓産、31は非河内産。

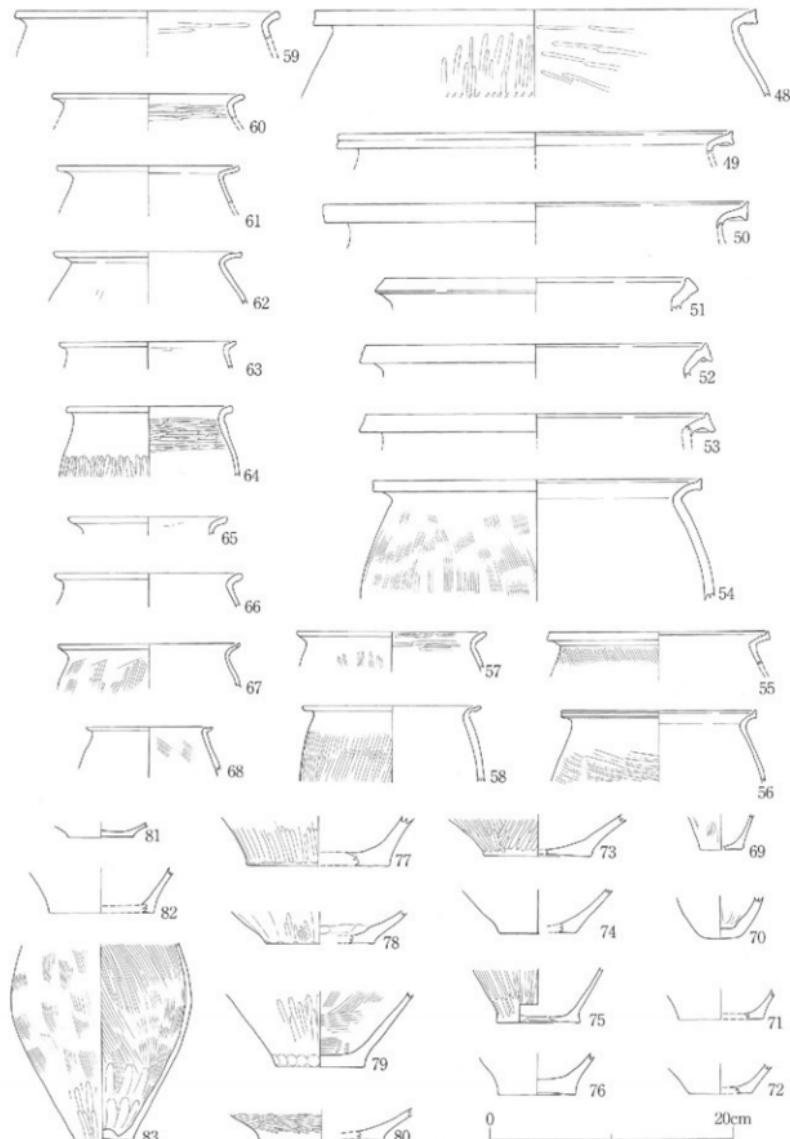
32~41は高杯である。32・33は口縁端部を欠損するが杯部である。口縁部は水平方向に伸びる。口縁部と杯部の内面境には1条の凸帯を廻らす。32は外面をナデ調整、内面をヘラミガキ調整する。33は内外面をヘラミガキ調整する。34~36は浅い椀状を呈する杯部である。34・35は口縁端部が面を持つ。36は丸く終る。34は内面をヘラミガキ調整する。35は2条、35は4条の凹線文が残る。内外面はナデ調整する。37は柱状部である。外面に8条の凹線文が残る。38~41は脚部である。立ち上がりは緩く、裾端部を上方に拡張する。38・39は風化が著しく調整法は不明である。39・40は外面をヘラミガキ調整、内面をヘラケズリ調整する。40は円孔を穿つ。生駒西麓産。

42は器台である。裾部は急に立ち上がり、裾端部が面を持つ。裾下部に3条の凹線文を施す。外面はヘラミガキ調整、内面はハケメ調整する。非河内産。

43は台付鉢の脚部である。裾部は急に外上方に伸び、裾端部がやや面を持つ。裾下部に3条の凹線文を施した後、円形と考えられる透かし孔を穿つ。内外面はヨコナデ調整する。生駒西麓産。



第10図 第10・11層出土土器実測図



第11図 第10・11層出土土器実測図

44~47は鉢である。44・45は体部がやや内湾気味に外上方に伸びる。所謂、直口の鉢である。44は口縁端部が丸く終る。口縁部直下に1条の凹線文を施す。風化が著しく調整法は不明である。45は口縁端部が面を持つ。口縁端部直下と体部に3条ずつ凹線文を施す。内外面はナデ調整する。46・47は体部が内傾する。口縁端部は段を持つ。46は口縁端部に1帯の櫛描簾状文を施す。体部にも1帯が残る。内面はナデ調整する。47は口縁端部に3条の凹線文を施す。体部には1帯の櫛描波状文が残る。内面はナデ調整する。生駒西麓産。

48~68は壺である。48~54は大型の壺である。体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は摘み上げ気味に上方へ拡張する。体部内外面はヘラミガキ調整やハケメ調整する。48は体部に刺突文が残る。55・56は体部の張りが大きく、口縁部が外折する。口縁端部は上方へ摘み上げ気味に拡張する。55は体部外面をハケメ調整、内面をナデ調整する。56は口縁端部に1条の凹線文を施す。体部外面はタタキ調整、内面はナデ調整する。体部外面を57~68は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は丸く終るものと面を持つものがある。体部内外面はヘラミガキ調整やハケメ調整するものが多い。生駒西麓産。

69~83は底部である。平底を呈するものが多いが丸底に近い平底のものもある。体部は立ち上がり緩いものと急なものがある。内外面はヘラミガキ調整やナデ調整するものが多い。76・79は非河内産、他は生駒西麓産。

古墳時代以降の土器

土器以外に埴輪・瓦を含めて説明を記す。

第2・3層出土土器(第13・14図 84~105)

弥生土器・須恵器・土師器・埴輪・瓦がある。

84は弥生上器の鉢である。体部は上方へ伸び、口縁部が強く外反する。口縁端部は面を持つ。体部内外面はハケメの後、ヘラミガキ調整する。生駒西麓産。

85・86は須恵器の蓋杯である。85は口縁部が内湾気味に伸び、口縁端部が丸く終る。内面に短いかえりが付く。内外面は回転ナデ調整する。86は天井部である。円形の摘みが付く。内外面は回転ナデ調整する。奈良時代。

土師器は皿・壺・羽釜の器種がある。

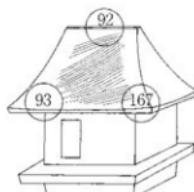
87は皿である。体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部が外上方へ伸びる。口縁端部は丸く終る。内外面はヨコナデ調整する。中世期。

88・89は壺である。口縁部が緩く外反し、口縁端部が面を持つ。内外面はヨコナデ調整する。平安時代。

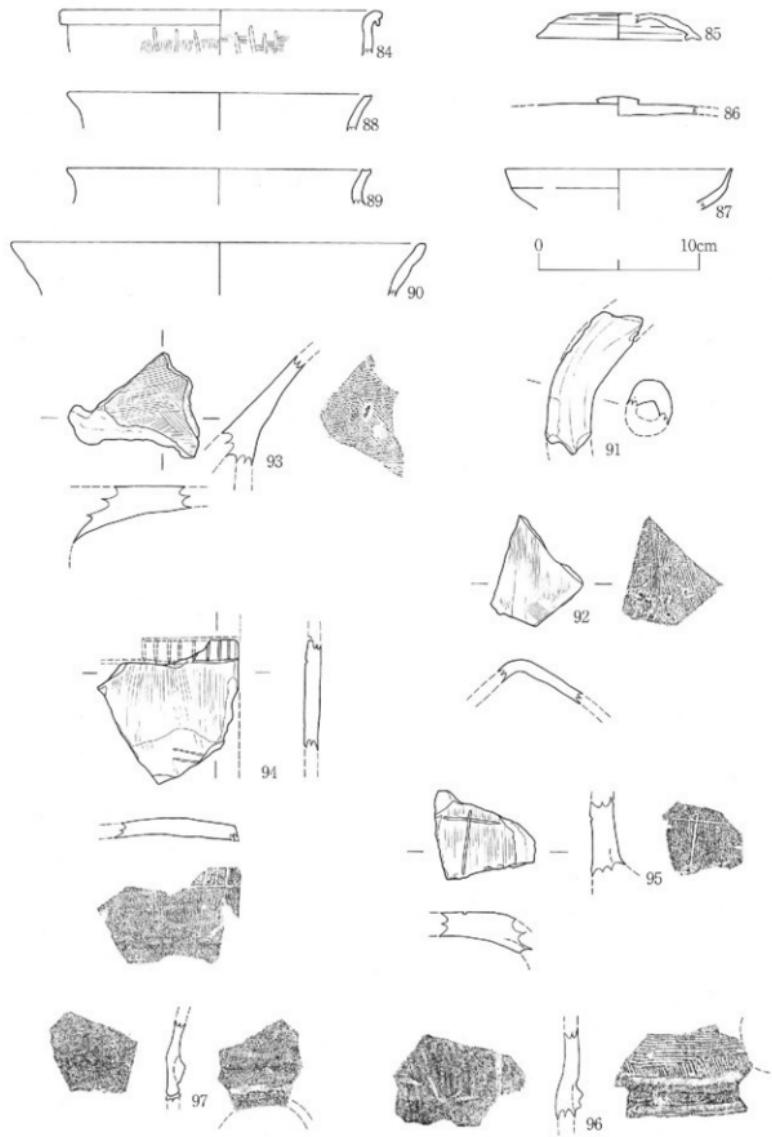
90は羽釜である。口縁部が大きく外反し、口縁端部が丸く終る。内外面はヨコナデ調整する。奈良時代。

埴輪は形象埴輪・円筒埴輪・朝顔形埴輪がある。

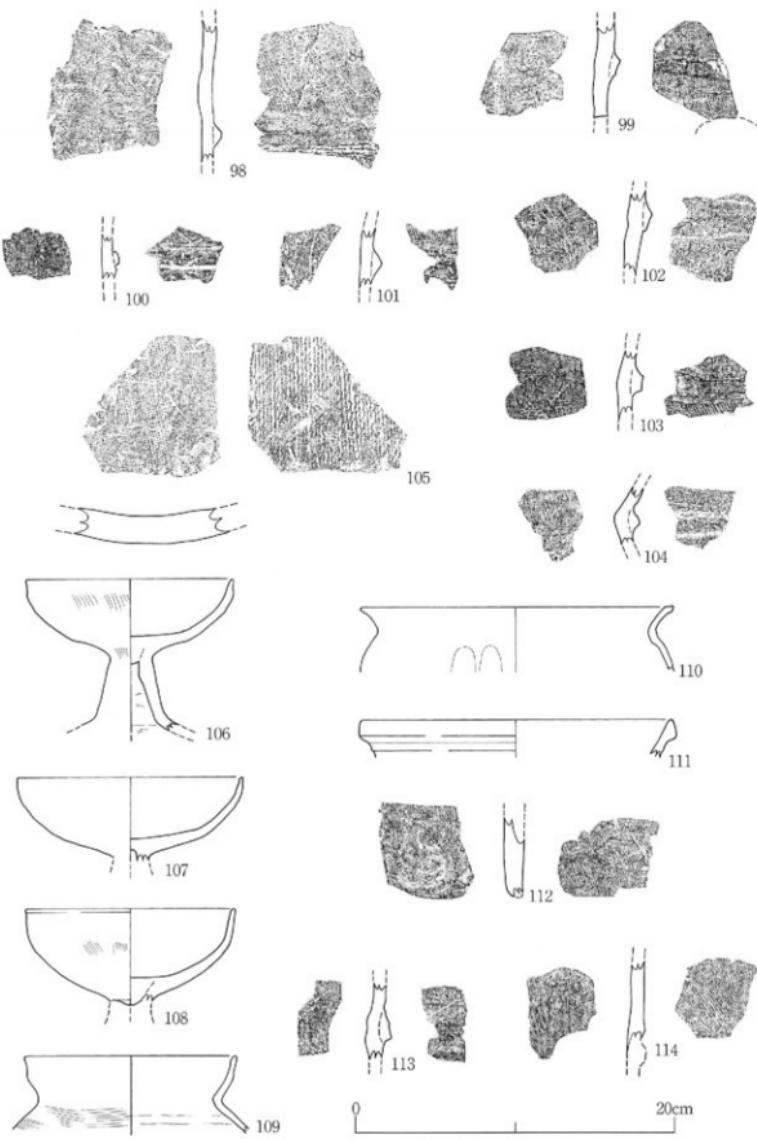
91~95は形象埴輪である。91は人物埴輪の腕の部分である。ゆるく湾曲し、中空である。全体をナデ調整する。92・93は寄棟造りの家形埴輪である。(第12図参照) 92は屋根の棟部分である。横断面が山形を呈する。外側はハケメ調整、内側はナデ調整する。93は屋根と壁が接する部分である。縦断面がイ字形を呈する。内外面はハケメ調整する。94・



第12図 家形埴輪実測位置図



第13圖 第2・3層出土土器実測図



第14图 第2层·搅乱层出土土器实测图

95は器種が不明であるが盾形埴輪の可能性がある。94は板状を呈し、外面にヘラ描文様を施す。上部は梯子状、下部は平行する2条の線刻が残る。外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。95は横断面が湾曲する。外面に十字形の線刻が残る。外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。古墳時代。

96～103は円筒埴輪である。体部の破片である。タガは断面形が低い台形や三角形を呈する。96・97・99は円形を呈すると考えられる透かし孔が残る。ほとんどのものは外面を縦方向のハケメ調整、内面をナデ調整する。96は外面を縦方向のハケメ調整の後、横方向のハケメ調整する。古墳時代。

104は朝顔形埴輪である。円筒部と口縁部の境の破片である。断面形が低い台形のタガを貼り付ける。古墳時代。

105は平瓦である。凸面は網目のタタキ調整する。凹面には布目の圧痕が残る。奈良時代。

搅乱層出土土器(第14図 106～114)

土師器・白磁・埴輪がある。

土師器は高杯と壺がある。

106～108は高杯である。浅い椀状を呈する杯部である。口縁端部は丸く終る。柱状部は緩く広がる。風化が著しく調整法はほとんど不明であるがハケメやヘラケズリの痕跡が一部残る。布留式期。

109・110は壺である。109は体部の張りが大きく、口縁部が内湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸く終る。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。110は体部の張りが小さく、口縁部が緩く外反する。口縁端部は丸く終る。体部外面はナデ調整する。109は布留式期、110は平安時代。

111は白磁の碗である。体部が外上方に伸び、口縁部に至る。口縁端部は外側へ肥厚する。ロクロナデ調整する。内外面は施釉する。中世期。

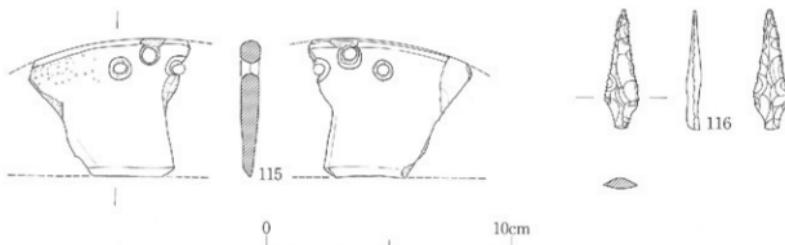
112～114は円筒埴輪である。体部の破片である。113は断面が低い台形のタガを貼り付ける。外面は縦方向のハケメ調整、内面はナデ調整する。古墳時代。

石器(第15図 115・116)

弥生時代の遺物包含層より出土した。石庖丁と石鎌がある。

115は磨製の石庖丁である。両端を欠損し、中央部が残る。背は半月形である。刃は直線の片刃である。表面に製作時の敲打痕が残る。背部に紐穴が3孔ある。本来は2孔であるが二次加工のためと考えられる。

116は打製の石鎌である。柳葉形を呈する。細部を押圧剥離によって丁寧に仕上げる。横断面は菱形を呈する。



第15図 石器実測図

2. B地区出土遺物

A地区と同様である。

弥生土器

A地区と同様である。

遺構出土土器

土坑5(第16図 117~120)

高杯・鉢・壺蓋・底部の器種がある。

117は高杯である。体部が浅い椀状を呈し、口縁端部がやや丸く終る。外面に5条の凹線文を施す。内外面はヘラミガキ調整する。生駒西麓産。

118は鉢である。体部が上方へ伸び、口縁端部が段を持つ。口縁端部に1帯の樹描縦状文を施す。体部にも1帯が残る。内面はヨコナデ調整する。生駒西麓産。

119は壺蓋である。体部の立ち上がりはゆるく、口縁端部が面を持つ。体部に小円孔を穿つ。風化が著しく調整法は不明である。生駒西麓産。

120は底部である。平底を呈し、体部の立ち上がりが緩い。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。生駒西麓産。

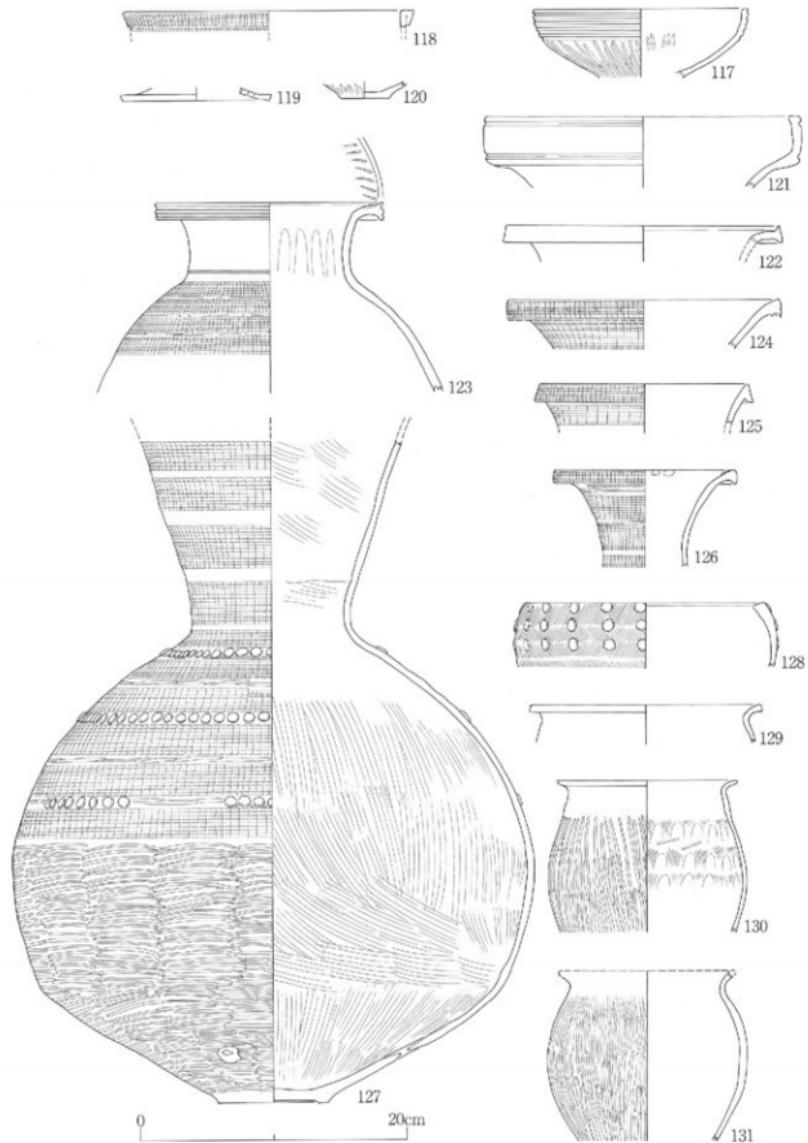
第15層出土土器(第16・17図 121~156)

壺・細頸壺・甕・鉢・壺蓋・高杯・底部の器種がある。

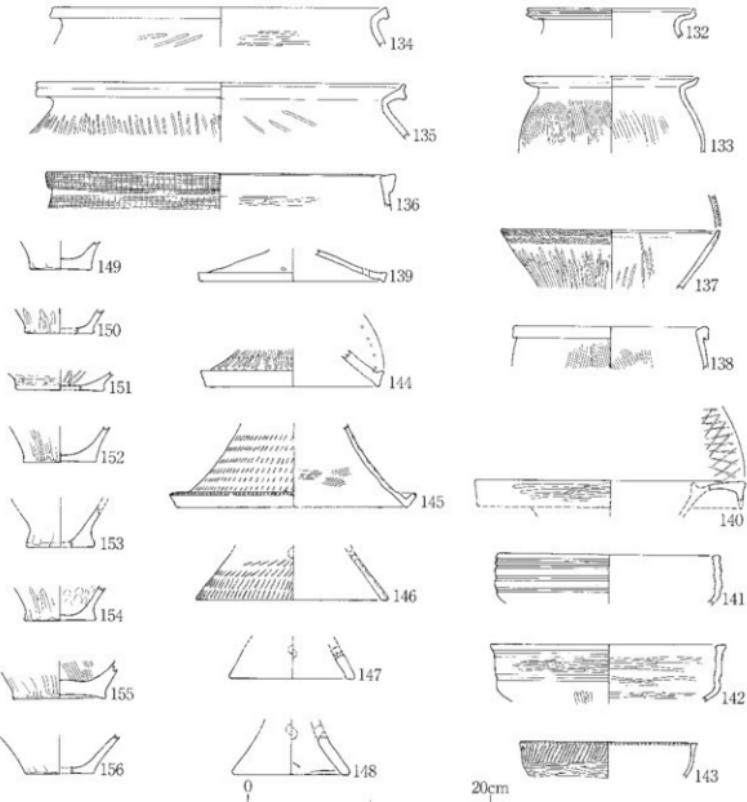
121~127は壺である。121は口頸部が大きく外反し、口縁端部を上方へ幅広く拡張する。口縁端部に2条の凹線文を施す。風化が著しく調整法は不明である。122・123は体部の張りが大きく、頸部が上方へ伸びる。口縁部は強く外反し、口縁端部を摘み上げ気味に拡張する。122は内外面をヨコナデ調整する。123は口縁端部に2条の凹線文、頸部から体部に1条の凹線文と4帯の樹描縦状文を施す。口縁部内面に1帯の列点文を施す。縦状文間は研磨する。風化のため調整法は不明である。124~126は口頸部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。口縁端部に1帯の縦状文と頸部に數帯施す。文様帶間は研磨する。内面はナデ調整する。124は口縁端部に円形刺突文を施す。126は口縁部内面に2ヶ1対の円形浮文を貼り付ける。127は口縁部を欠損する。底部はややくぼむ平底である。体部はやや下位で大きく張り、頸部が外上方へ伸びる。頸部から体部に10帯の縦状文が残る。文様帶間は研磨する。体部には3帯の円形浮文を貼り付ける。外面はヘラミガキ調整、内面はハケメ調整する。体部下半に焼成後の穿孔がある。121・122は非河内産、他は生駒西麓産。

128は細頸壺である。口縁部が大きく内湾し、口縁端部が面を持つ。口縁部に樹描列点文によって羽状文を描く。縦に3ヶ1対の円形浮文を貼り付ける。内面はヨコナデ調整する。生駒西麓産。

129~135は甕である。129~131は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は丸く終るものと面を持つものがある。129は風化が著しく調整法は不明である。130は体部外面をヘラミガキ調整する。内面はハケメの後、ナデ調整する。131は体部外面の上半をハケメ調整する。下半はヘラケズリの後、ヘラミガキ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。132・133は体部の張りが大きく、口縁部が外折する。口縁端部は上方へ摘み上げ気味に拡張する。132は口縁端部に1条の凹線文を施す。風化が著しく調整法は不明である。133は体部内外面をハケメ調整する。134・135は大型の甕である。体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。134は口縁端部が面を持つ。135は口



第16図 土坑5・第15層出土土器実測図



第17図 第15層出土土器実測図

縁端部を摘み上げ気味に上方へ拡張する。体部内外面はヘラミガキ調整する。133は非河内産、他は生駒西麓産。

136～138は鉢である。136は体部が内傾し、口縁端部が段を持つ。口縁端部に1帯の櫛描線状文を施す。体部にも1帯が残る。内面はヘラミガキ調整する。137は体部が外上方に伸び、口縁端部が面を持つ。所謂、直Lの鉢である。口縁部に櫛描列点文によって羽状文を1帯描く。口縁端部には1帯の列点文を施す。体部内外面はヘラミガキ調整する。138は体部が内傾し、口縁部が強く外反する。体部内外面はハケメ調整する。生駒西麓産。

139は壺蓋である。縁部の立ち上がりはゆるく、口縁端部は面を持つ。体部に小円孔を穿つ。内外面はナデ調整する。生駒西麓産。

140～148は高杯である。140は口縁部が水平方向に伸び、口縁端部を下方へ大きく拡張する。口縁部に斜格子の暗文を施す。外面はヘラミガキ調整する。141・142は体部が外上方へ広がり、口縁部は上方へ伸びる。口縁端部は面を持つ。141は4条、142は2条の凹線文を施す。141は風化が著

しく調整法は不明である。142は内外面をヘラミガキ調整する。143は体部が浅い椀状を呈し、口縁端部が面を持つ。口縁端部に刻み目、口縁部に1帯の櫛描列点文を施す。外面はヘラミガキ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。144・145は裾部である。立ち上がりは緩く、裾端部を上方に拡張する。144は裾下部に円形刺突文を施す。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。145は裾端部に刻み目、裾部に7帯のヘラ描列点文を施す。外面はナデ調整する。内面はハケメの後、ナデ調整する。146～148は裾部が急に立ち上がり、裾端部が面を持つ。小円孔を穿つ。146はヘラ描列点文を施す。4帯が残る。風化が著しく調整法は不明である。141は非河内産、他は生駒西麓産。

149～156は底部である。平底を呈するものが多いがやや上げ底を呈するものもある。体部は立ち上がりが急なものが多い。内外面はヘラミガキ調整やナデ調整するものが多い。153は非河内産、他は生駒西麓産。

古墳時代以降の土器

A地区と同様である。

遺構出土の土器

溝7(第18図 158～163・165～167)

須恵器・土師器・瓦器・埴輪がある。

須恵器は鉢と器台の器種がある。

158は鉢である。体部の張りは少なく、口縁部が上方へ伸びる。口縁端部は面を持つ。内外面は回転ナデ調整する。平安時代。

159は器台である。裾部は内湾気味に立ち上がり、裾端部が面を持つ。裾部に3条の凹線文と櫛描波状文を施す。波状文は1帯が残る。内外面は回転ナデ調整する。古墳時代。

160は土師器の皿である。体部が緩く立ち上がり、口縁部が直線的に外上方へ伸びる。口縁端部は丸く終る。体部内外面はナデ調整する。中世期。

161～163は瓦器の椀である。体部はやや浅く、口縁部がわずかに外反する。口縁端部は丸く終る。所謂、和泉型の椀である。161・163は体部内外面をヘラミガキ調整する。162は体部外面をユビオサエ、内面をヘラミガキ調整する。中世期。

埴輪は円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪がある。

165は円筒埴輪である。体部の破片である。風化が著しく調整法は不明である。古墳時代。

166は朝顔形埴輪である。円筒部と口縁部の境の破片である。断面形が三角形のタガを貼り付ける。古墳時代。

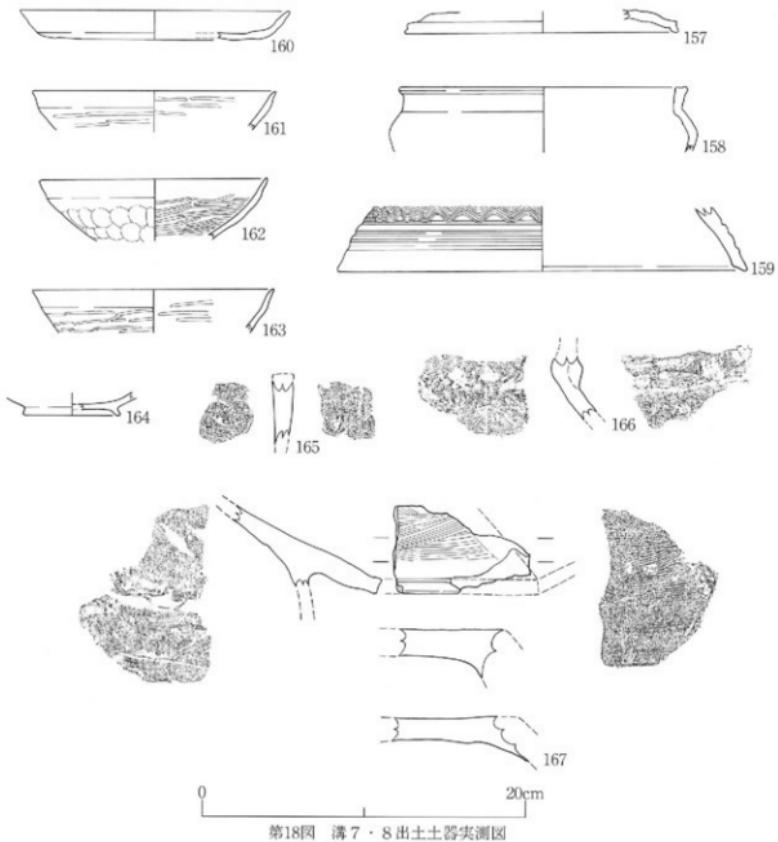
167は形象埴輪である。寄棟造りの家形埴輪である(第12図参照)。屋根の軒先部分である。外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。古墳時代。

溝8(第18図 157・164)

須恵器と瓦器がある。

157は須恵器の蓋杯である。天井部は平坦である。口縁部は緩く外反し、口縁端部を摘み上げ気味に拡張する。内外面は回転ナデ調整する。奈良時代。

164は瓦器の椀である。底部であり、低い高台を貼り付ける。風化が著しく調整法は不明である。中世期。



第3・4層出土土器(第19図 168~180)

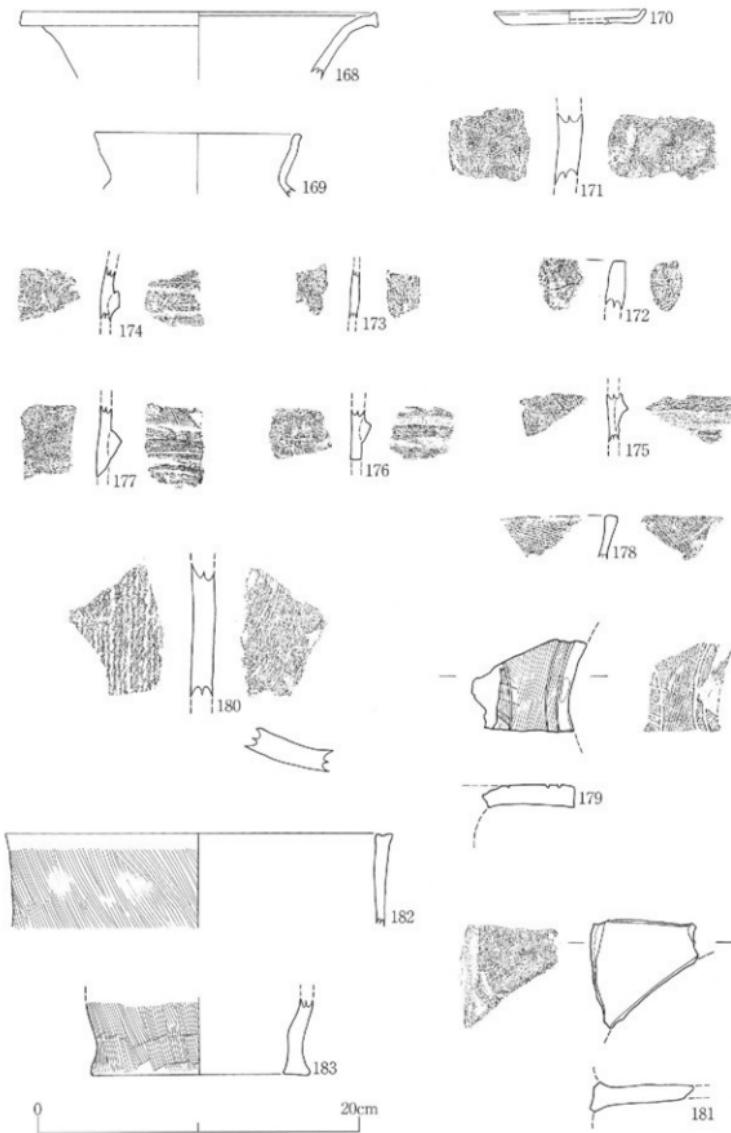
須恵器・土師器・製塙土器・埴輪・瓦がある。

168は須恵器の壺である。口頭部が大きく外反し、口縁端部は面を持つ。内外面は回転ナデ調整する。土師器は壺と皿の器種がある。

169は壺である。口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部がやや面を持つ。内外面はヨコナデ調整する。布留式期。

170は皿である。平底の底部より口縁部が短く、外上方へ伸びる。口縁端部は丸く終る。内外面はナデ調整する。中世期。

171~173は製塙土器である。器壁は厚い。細片のため形状は不明である。内外面はナデ調整する。奈良~平安時代。



第19圖 第3・4層、扰乱層出土土器実測図

埴輪は円筒埴輪と形象埴輪がある。

174～178は円筒埴輪である。174～177は体部の破片である。タガは断面形が低い台形や三角形を呈する。ほとんどのものは外面を縦方向のハケメ調整、内面はナデ調整する。177は内面を斜め方向のハケメ調整する。178は口縁部である。口縁端部が面を持つ。内外面を斜め方向のハケメ調整する。古墳時代。

179は形象埴輪である。器種が不明であるが盾形埴輪の可能性がある。板状を呈し、側縁が弧を描く。外面にヘラ描文様を施す。側縁に平行して2条、その内側に梯子状の線刻を施す。外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。

180は平瓦である。凸面は純目のタタキ調整、凹面はハケメ調整する。奈良時代。

搅乱層出土土器(第19図 181～183)

形象埴輪と円筒埴輪がある。

181は形象埴輪である。器種が不明である。板状の三角形を呈する。内外面はナデ調整する。古墳時代。

182・183は円筒埴輪である。182は口縁部が上方に伸び、口縁端部が面を持つ。183は基底部である。体部は外反した後、内湾気味に立ち上がる。底面は面を持つ。外面は縦方向のハケメ調整、内面はナデ調整する。古墳時代。

V. まとめ

今回の調査地は瓜生堂遺跡の南端に位置する。現地は第二寝屋川の西堤防上である。調査範囲は44m²と非常に狭い範囲であったが数々の知見を得ることができた。以下、既存の調査成果を踏まえてまとめとしたい。

今回の調査では弥生時代と奈良時代～中世期の遺構を検出した。弥生時代の遺構は溝・土坑・ピット、奈良時代～中世期は溝・ピットがある。2時期の生活面が周辺に広がっていると考えられる。調査地点は当遺跡の南限になるが巨摩廃寺遺跡に続いている。また、遺物は弥生時代、古墳時代、奈良～中世期のものがある。

出土遺物中で特筆すべき資料は弥生時代中期の絵画文土器がある。弥生時代の絵画文土器は中期に盛行することが今日までの研究で知られている。東大阪市域では当遺跡と西ノ辻・鬼虎川遺跡で確認されており、中期中～後半の資料である。絵画は動物、人物、建物などが多い。当遺跡では鹿・鳥・魚・高床建物などを描いた資料が既存の発掘調査で出土している。

今回、当遺跡より出土した絵画文土器は堅穴住居と考えられる。絵画は壺の外面上半部に描いている。欠損部を復原すると第8図のようになると考えられる。従来、知られている建物絵画は高床建物を描いているものがほとんどであり、堅穴住居の出土例は少ない。今回、出土した堅穴住居と既存の高床建物を比較してみる。堅穴住居の下部構造であるスカート状の線刻を消去すると高床建物と酷似する。このことから上部構造のみで高床建物と決定することは慎重におこなう必要があると思われる。いずれにしても、今回の発掘調査で出土した当資料は弥生時代の絵画文土器を研究する上で貴重な資料となろう。

また、堅穴住居の周辺に線刻が2ヶ所認められることから当資料には複数の絵画が描かれていたと考えられる。破片のため何が描かれているかは不明である。

古墳時代の遺構は確認されていないが須恵器・土器・埴輪などが出土した。埴輪は円筒埴輪・家形埴輪・人物埴輪などがある。53次に及ぶ発掘調査で当遺跡のはば全域で埴輪の出土が確認されている。遺物量は多いが古墳は検出されていない。これは、当遺跡では奈良時代以降の集落が広がっており、その際に整地がおこなわれており古墳は削平された可能性が高い。

参考文献

- 中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会 1971 「瓜生堂遺跡」
瓜生堂遺跡調査会 1972 「瓜生堂遺跡資料編」
瓜生堂遺跡調査会 1973 「瓜生堂遺跡II」
瓜生堂遺跡調査会 1981 「瓜生堂遺跡III」
大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1980 「瓜生堂遺跡」
(財)大阪文化財センター 1982 「丹摩・瓜生堂」
東大阪市遺跡保護調査会 1976 「上小阪・瓜生堂・新家遺跡調査報告書」
(財)東大阪市文化財協会 1984 「(財)東大阪市文化財協会年報1983年度」「瓜生堂遺跡・西岩田遺跡発掘調査概要」
(財)東大阪市文化財協会 1984 「(財)東大阪市文化財協会年報1983年度」「瓜生堂遺跡・若江遺跡発掘調査概要」
(財)東大阪市文化財協会 1989 「(財)東大阪市文化財協会年報集1988年度」「瓜生堂遺跡発掘調査概報」
(財)東大阪市文化財協会 1998 「(財)東大阪市文化財協会既往集-1997年度-」「瓜生堂遺跡第38次発掘調査報告書」
東大阪市教育委員会 1979 「瓜生堂上層遺跡・旦池遺跡発掘調査報告」
東大阪市教育委員会 1990 「山賀遺跡発掘調査概要 一付 弓刀・瓜生堂・楊手・若江遺跡発掘調査概要-」
東大阪市教育委員会 1999 「瓜生堂遺跡第46次発掘調査中間報告書」
東大阪市教育委員会 2000 「瓜生堂遺跡第47-1次発掘調査中間報告書」
東大阪市教育委員会 2002 「瓜生堂遺跡第46、47-1・2次発掘調査報告書」
東大阪市教育委員会 2006 「瓜生堂遺跡第52次発掘調査報告」

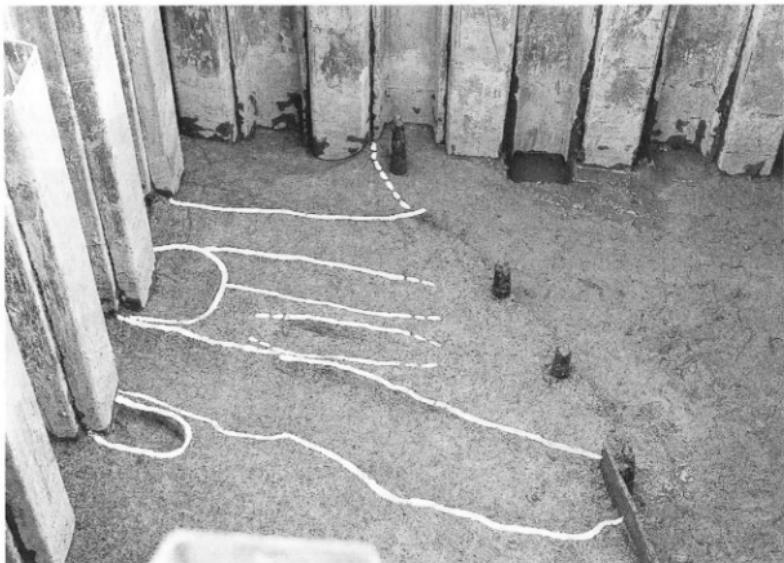
図 版



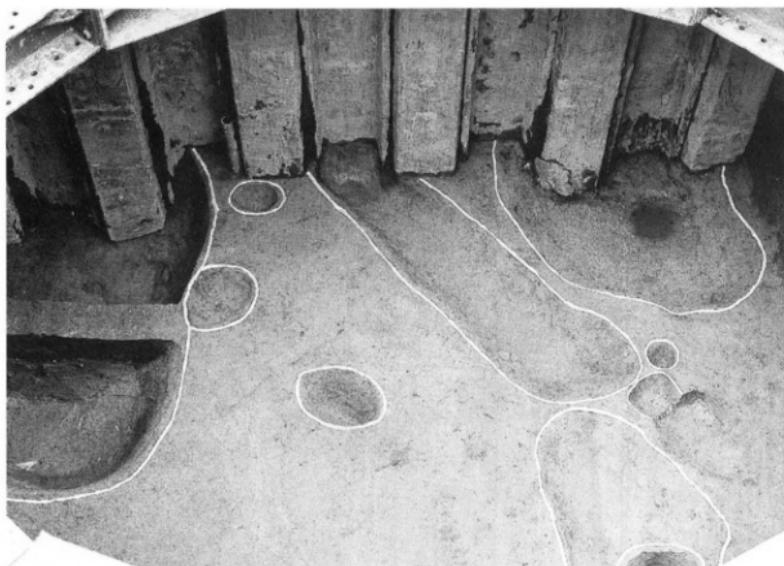
1. 調査地遠景（北より）



2. 調査地近景（南より）

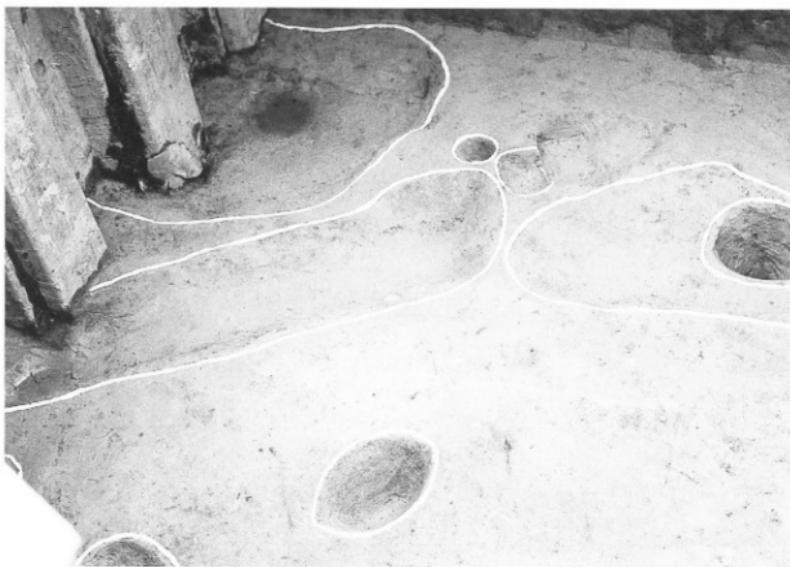


1. A地区第4層上面遺構（北より）



2. A地区第12層上面遺構（東より）

図版 3
遺構



1. A地区第12層上面遺構（南より）



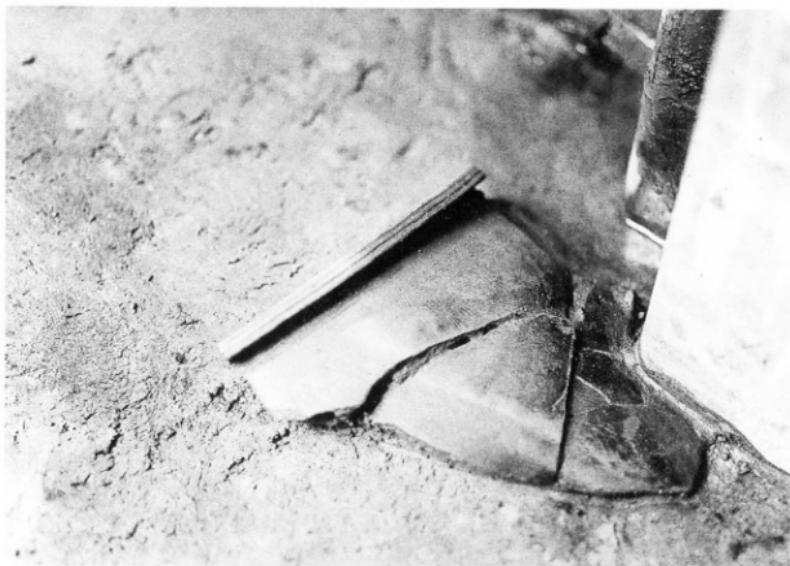
2. A地区第12層上面遺構（北より）



1. A地区第24層上面自然流路（東より）



2. 自然流路内断面（南より）



1. A 地区土坑 1 内弥生土器出土状況（東より）



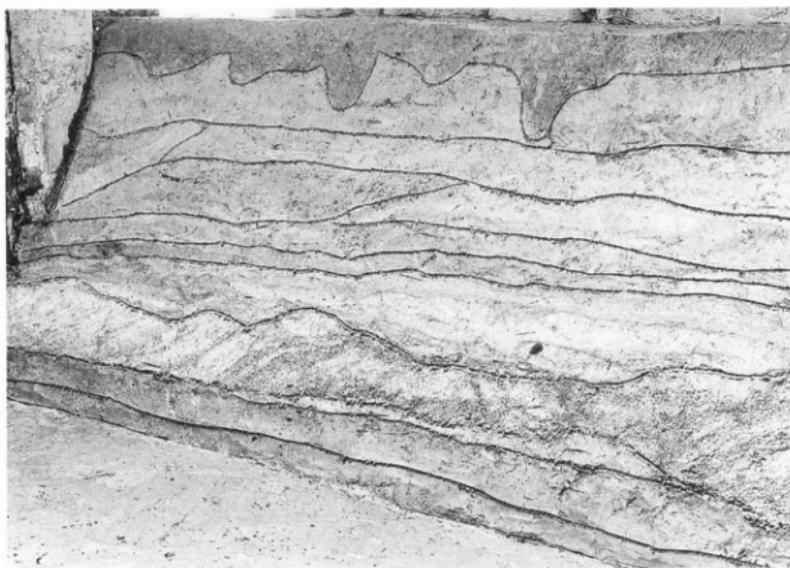
2. A 地区第10層内弥生土器出土状況（北より）

図版
6

遺構



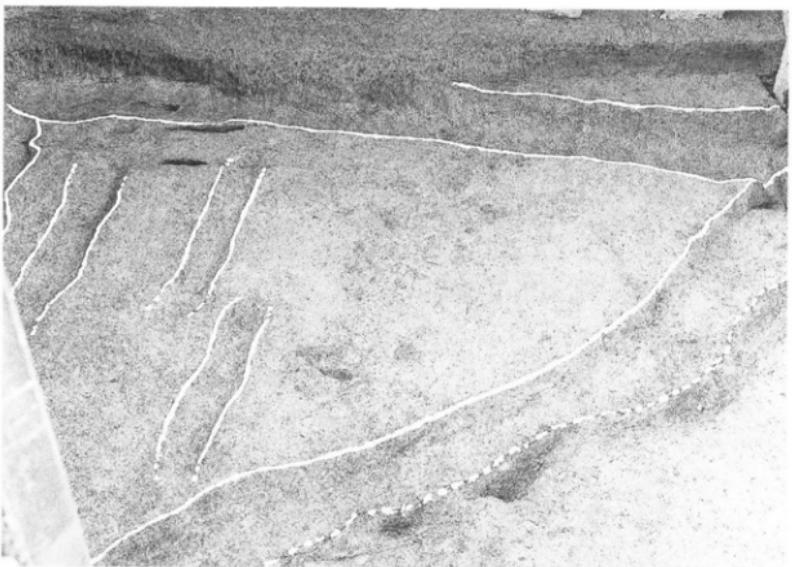
1. A地区上層北壁断面（南より）



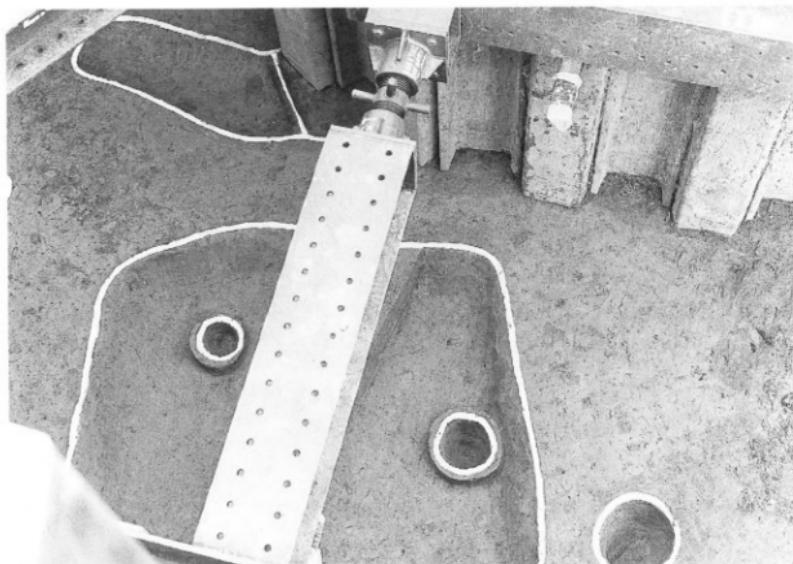
2. A地区下層北壁断面（南より）



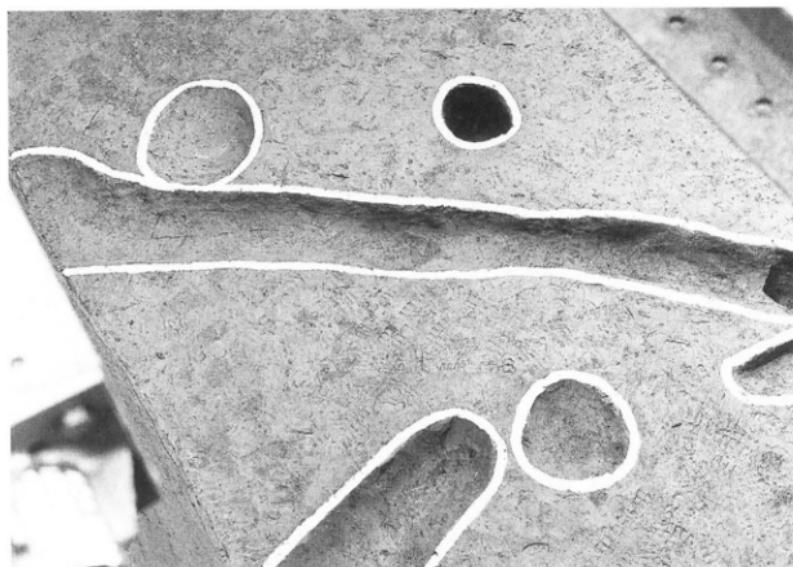
1. A地区作業風景



2. B地区第5層上面遺構（東より）



1. B地区第16層上面遺構（南より）



2. B地区第16層上面遺構（西より）

図版 9
遺構



1. B 地区第15層内弥生土器出土状況（北より）



2. B 地区第15層内弥生土器出土状況（西より）



1. B地区上層西壁断面（東より）



2. B地区下層西壁断面（東より）



1. B 地区上層南壁断面（北より）



2. B 地区上層南壁断面（北より）



1



2



17



16



30



30

A地区第25層出土縄文土器 深鉢、土坑1・2、第10・11層出土弥生土器 絵画文土器・甕・壺蓋

図版
13
遺物



107



108



108

28



106



108



115

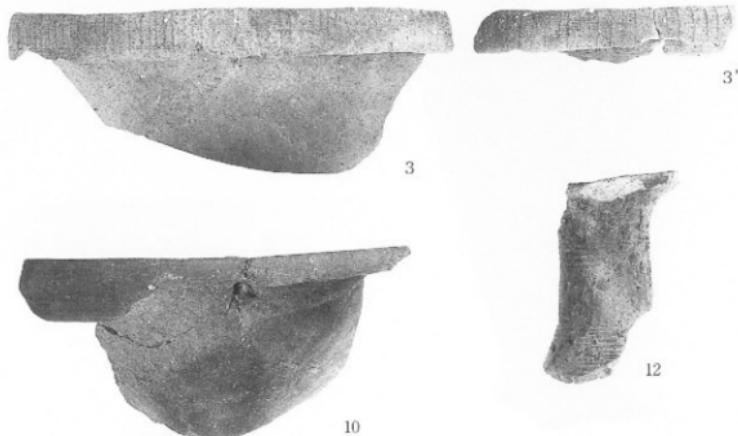


116

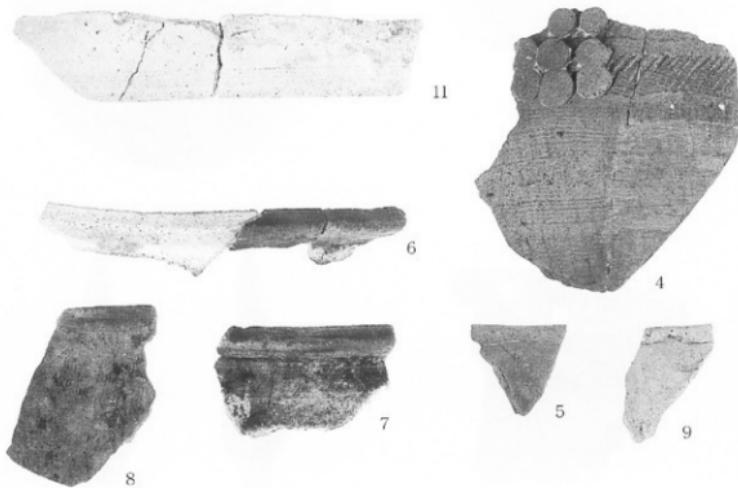


116'

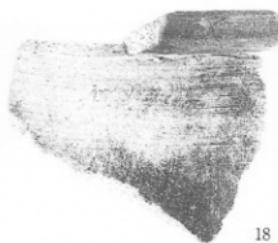
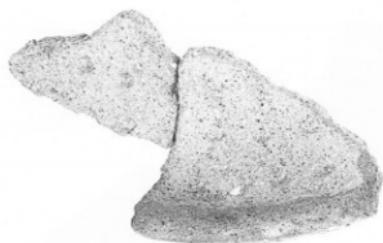
A地区第10・11層出土弥生土器 細頸壺、第10・11層出土石器 石庖丁・石錐、搅乱層出土土師器 高杯



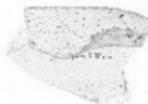
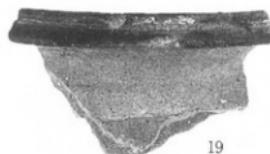
1. A地区土坑2出土弥生土器 壺・高杯



2. A地区土坑2出土弥生土器 細頸壺・高杯・無頸壺・甕



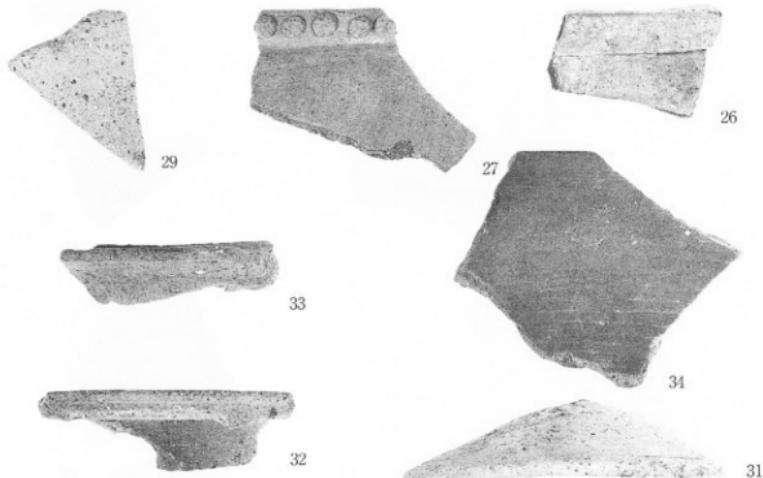
1. A地区土坑1~3出土弥生土器 高杯・壺・底部



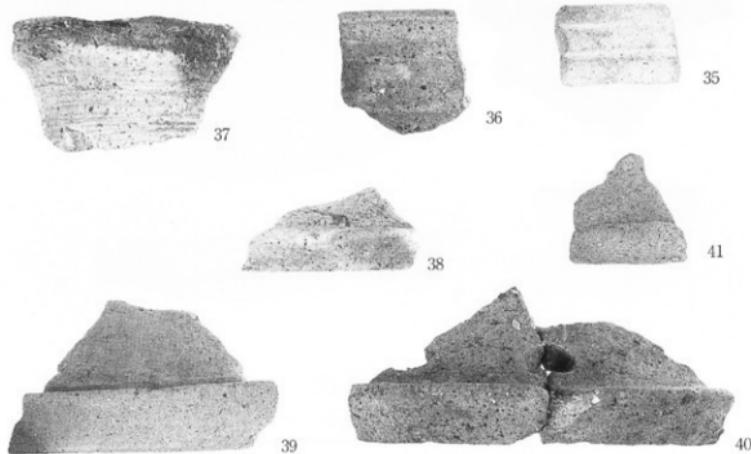
2. A地区第10・11層出土弥生土器 壺

圖版
16

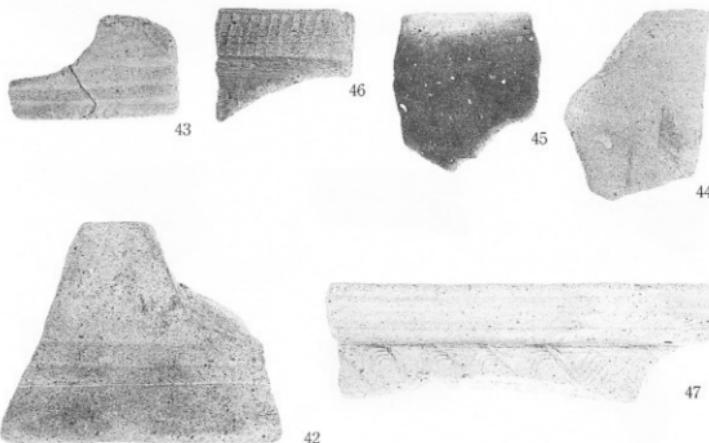
遺物



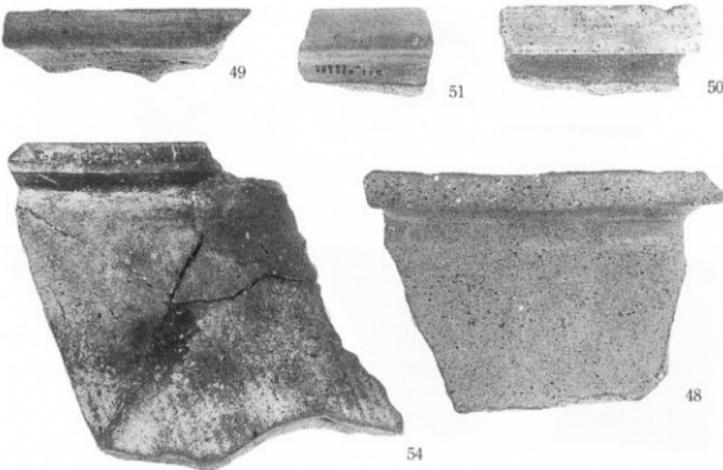
1. A地区第10・11層出土胚生土器 無頸壺、壺蓋、水差形土器、高杯



2. A地区第10・11層出土胚生土器 高杯



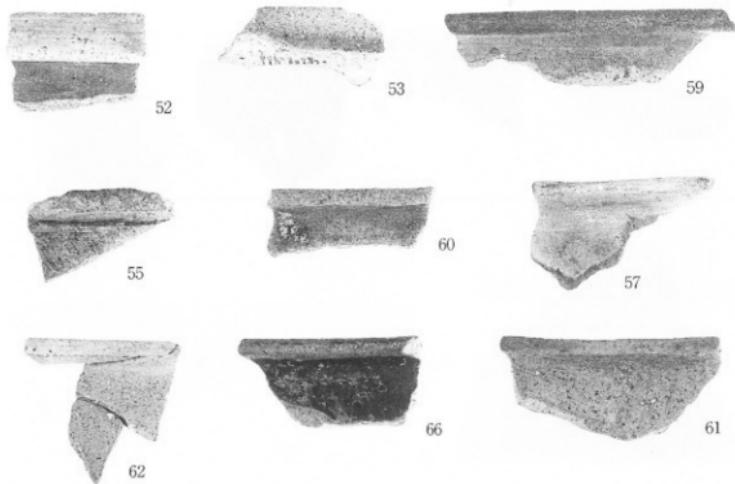
1. A地区第10・11層出土弥生土器 鉢・台付鉢・器台



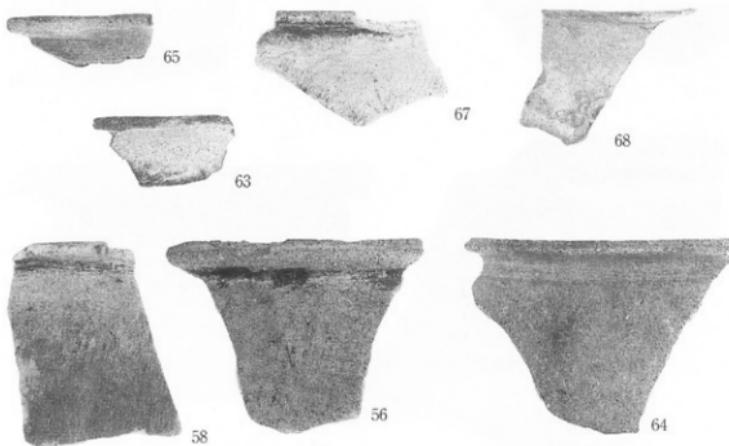
2. A地区第10・11層出土弥生土器 鉢

図版
18

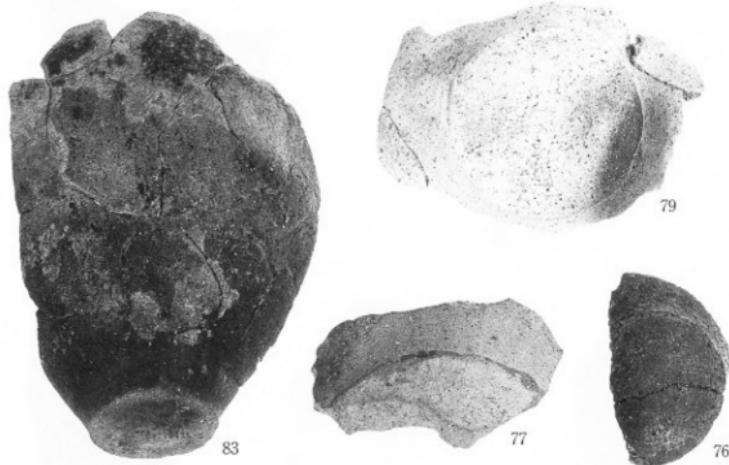
遺物



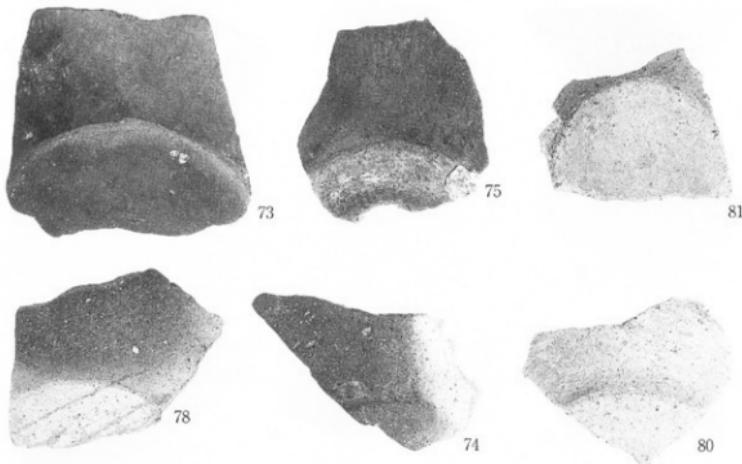
1. A地区第10・11層出土弥生土器 壺



2. A地区第10・11層出土弥生土器 壺



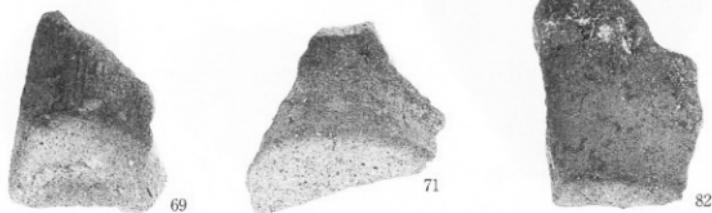
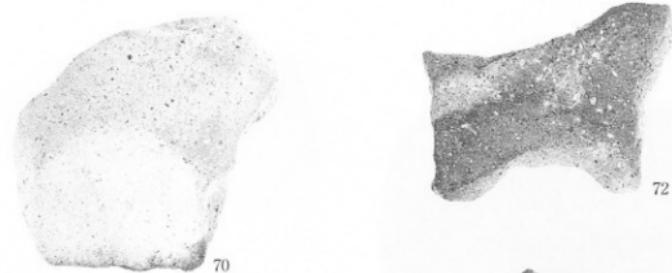
1. A地区第10・11層出土弥生土器 底部



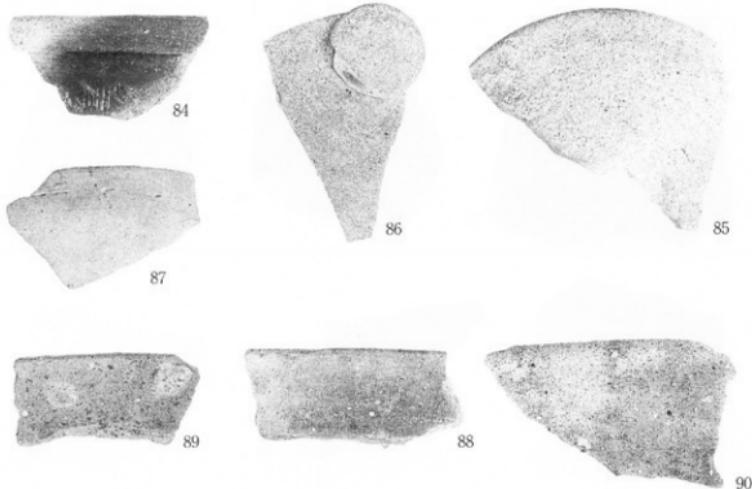
2. A地区第10・11層出土弥生土器 底部

図版
20

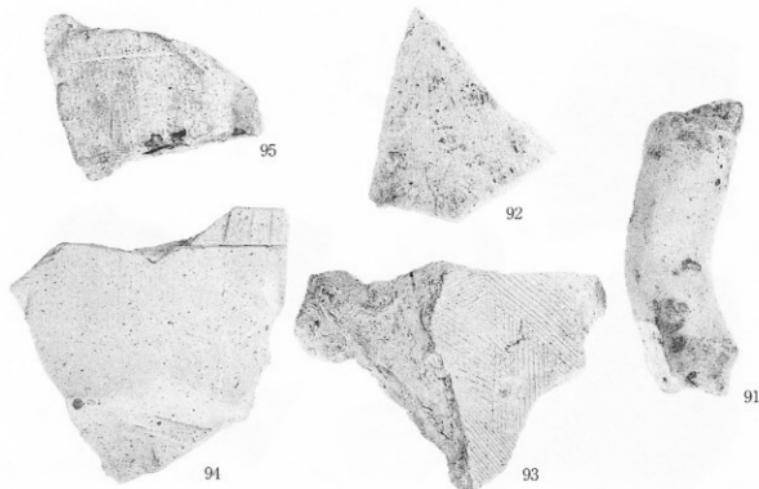
遺物



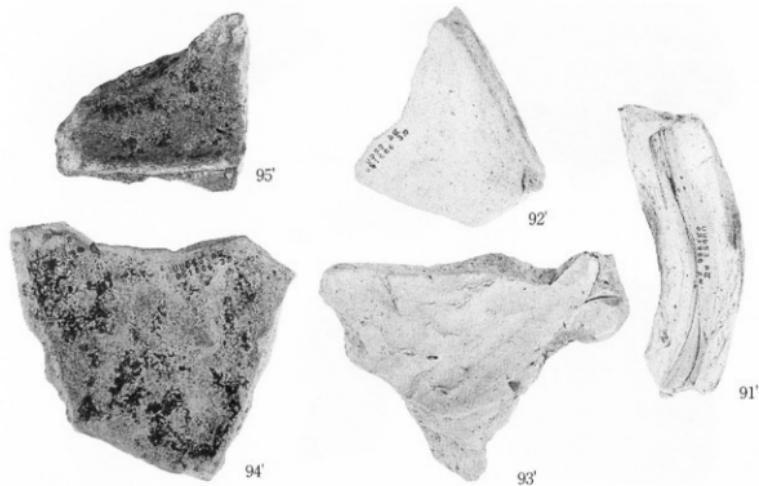
1. A地区第10・11層出土弥生土器 底部



2. A地区第2・3層出土弥生土器 鉢、須恵器 蓋杯、土師器 壺・羽釜・皿



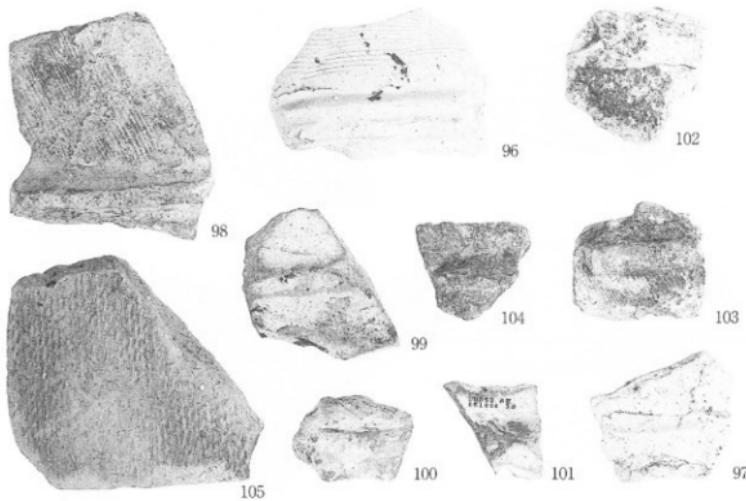
1. A地区第2・3層出土埴輪 形象埴輪



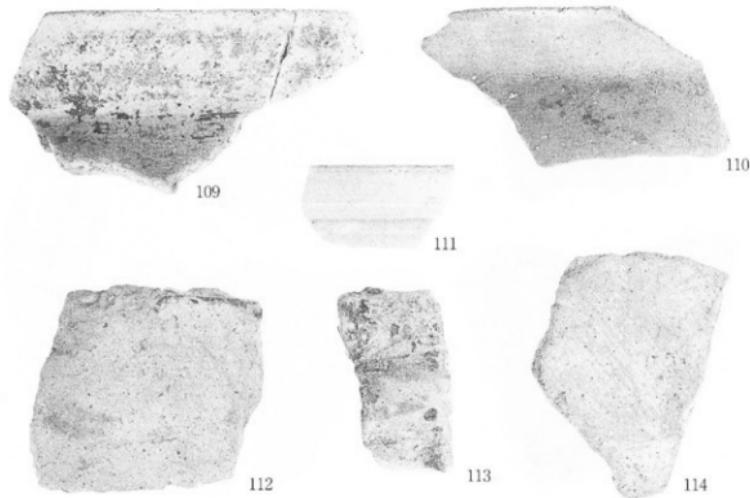
2. 同上(裏)

図版
22

遺物



1. A地区第2・3層出土埴輪 円筒埴輪・形象埴輪、平瓦



2. A地区擾乱層出土埴輪 円筒埴輪・土師器 壺、白磁 梵



127



123

1. B地区第15層出土弥生土器 壺



139



117

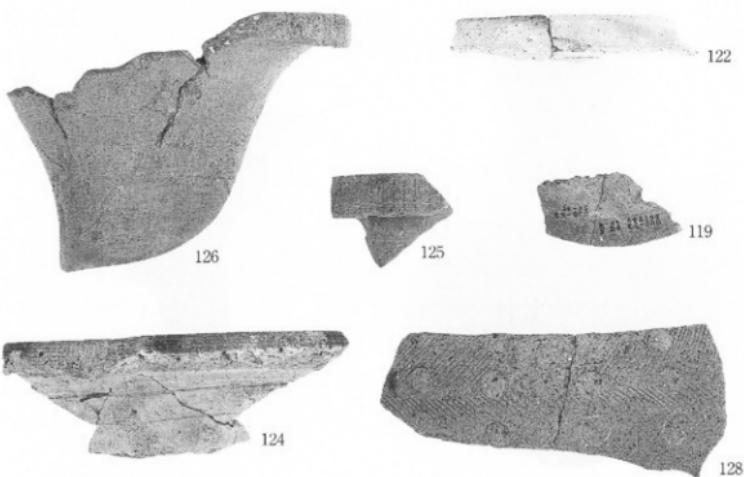


120

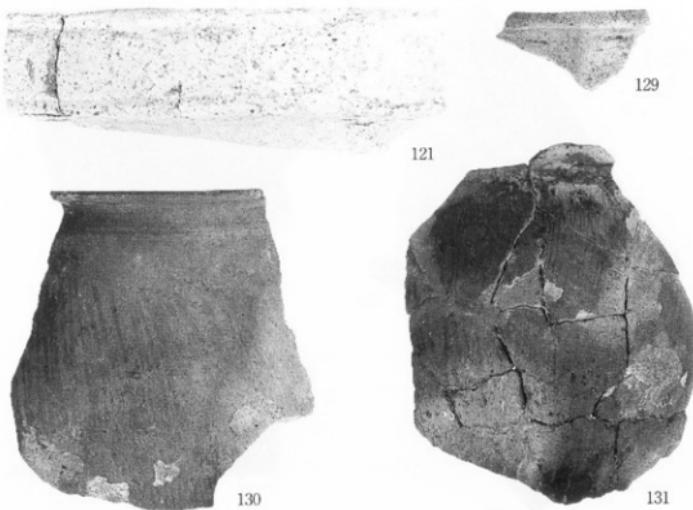


118

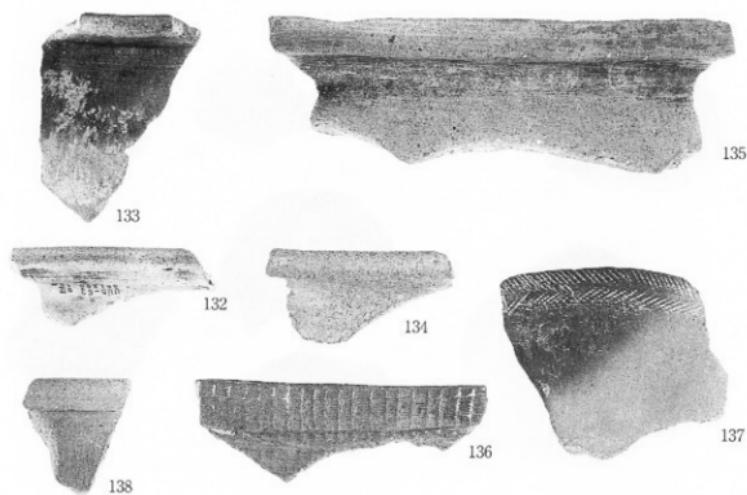
2. B地区土坑5出土弥生土器 高杯・鉢・壺蓋・底部



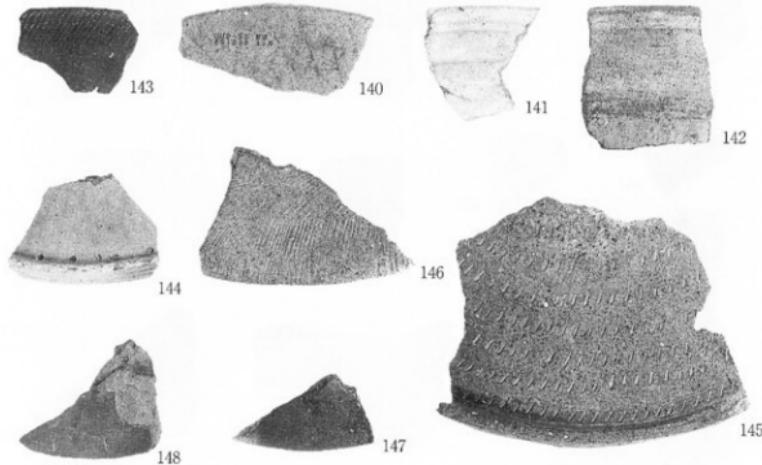
1. B地区第15層出土弥生土器 壺・細頸壺・壺蓋



2. B地区第15層出土弥生土器 壺・壺



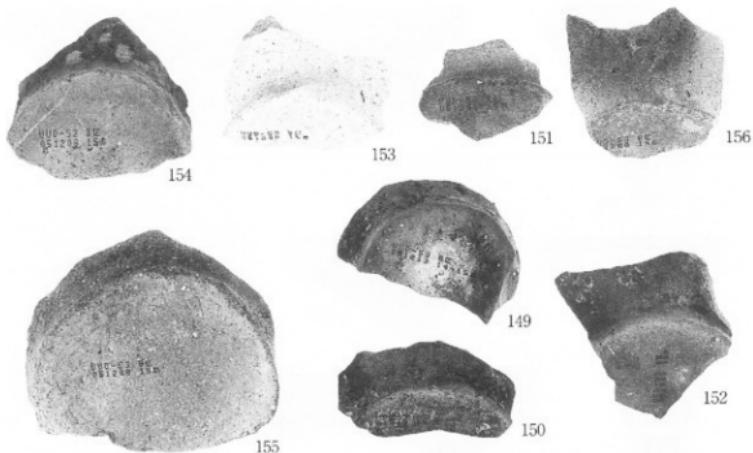
1. B地区第15層出土弥生土器 瓢・鉢



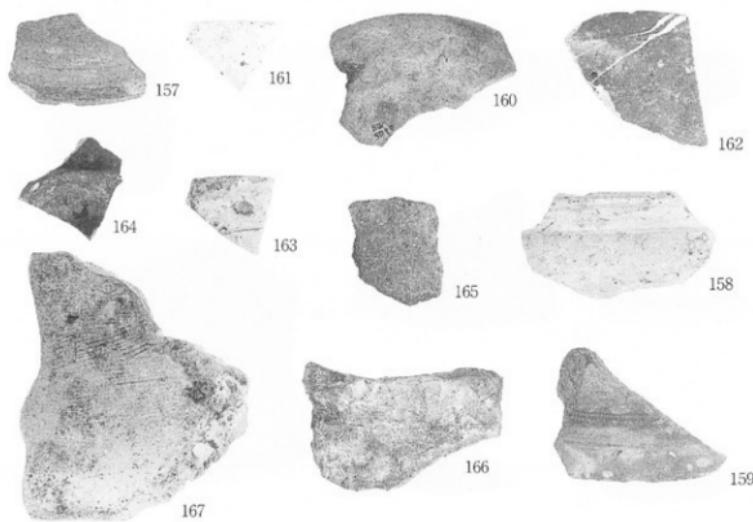
2. B地区第15層出土弥生土器 高杯

図版
26

遺物



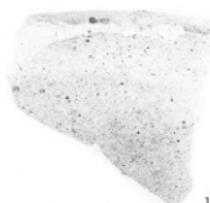
1. B地区第15層出土弥生土器 底部



2. B地区溝7・8出土須恵器 鉢・器台・蓋杯、土師器 盆、瓦器 椽、埴輪 形象埴輪・円筒埴輪



169



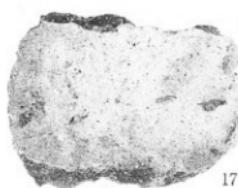
168



170



180



171



173



172

1. B地区第3・4層出土弥生土器 壺、須恵器 壺、土師器 壺・皿、製塙土器、平瓦



175



176



178



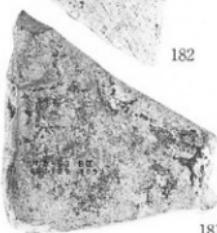
182



177



174



181



183



179

2. B地区第3・4層、搅乱層出土埴輪 形象埴輪・円筒埴輪

報告書抄録

ふりがな	うりゅうどういせきだい53じはっくつちょうさほうこく					
書名	瓜生堂遺跡第53次発掘調査報告					
副書名						
巻次						
シリーズ名						
シリーズ番号						
編著者名	才原金弘・小川紀子					
編集機関	東大阪市教育委員会					
所在地	〒577-8521 大阪府東大阪市荒本北50番地の4 Tel06-4309-3283					
発行機関	東大阪市教育委員会					
発行年月日	2007年3月31日					
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
瓜生堂遺跡	大阪府 東大阪市 若江西新町 2丁目	27227	95	平成17年10 月3日～12 月13日	44m ²	一級河川 發屋川八 戸ノ里公 園(小阪) 調節池築 造工事 (排水施 設工)
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
集落跡	弥生時代 古墳時代 奈良時代～中世	ピット・溝・土坑		弥生土器・須恵 器・土師器・瓦 器・埴輪・瓦・ 石器	弥生時代中期の絵画 文土器	

瓜生堂遺跡第53次発掘調査報告

平成19年3月31日

発行所 東大阪市教育委員会

印刷所 (株)近畿印刷センター

